

祭りと葬式を行き交う身体

奴振りを担う人々と葬祭業

福持昌之

Persons Who Come and Go between Festivals and Funerals : Yakkofuri Performers and the Funeral Business
FUKUMOCHI Masayuki

はじめに

- ① 大阪の葬列における僧列
- ② 近世の奴振りの諸相
- ③ 大阪の葬祭業者と供奴
おわりに

【論文要旨】

大名行列を象徴する奴振りは、もともと武士の供揃いの規模が大きくなった奴行列である。明暦頃には仮装の風流として祭礼行列にも取り入れられた。その後、独特の所作が芸能としての価値を持ち、歌舞伎舞踊に影響を与え、大名行列でも重宝される。現在は、全国各地の祭礼行列に見られる民俗芸能である。

大阪では霊柩車が登場する以前、野辺送りの葬列にこの奴振りがみられた。祭りを賑やかす行列仕立てが、しめやかな葬列にも共通してみられたことは、いかにも不釣り合いにみえる。このことは大阪の葬儀業者には、もともと近世に大名行列への人足を供給していた業者があったため、明治になって新しいビジネスとして、大きな葬儀に際して葬列に奴振りを取り入れたのだと理解されてきた。また、奴振りを伴う派手で華美な葬列を好むことが、大阪の特異性であるとも言われてきた。

しかし、葬列の構成を見ると、奴振りは僧列の一部であることが明らかになった。つまり、僧侶の供揃えとして葬列に加わっているのである。僧侶の供揃えに奴行列

がつく事例は、近江の湖東地域の寺院に伝わる近世文書にも確認することができる。そこでは、葬列の一部に御導師人足もしくは寺人足と呼ばれる僧列があり、奴行列がみられた。

また、大阪のいくつかの神社では、祭礼の際に葬儀業者が中心になって奴振りがおこなわれてきた。大阪の葬儀業者は、もともと大名行列の人足方であったことから、日常から神社仏閣等に出入りし、祭礼の際に棒頭として采配を振るい、奴行列をはじめさまざまな人足を手配した。この棒頭は、大阪天満宮は駕友、御霊神社は熊田屋、難波神社は阿波弥、熊野神社は平久と決っていた。大阪のキタとミナミでは、奴振りの所作が異なっていたという。

大阪の葬列にみる奴振りの、死者へのセレモニーと、清浄なる神事との間を自在に行き来する身体は、葬列を構成する僧列の供揃えであることと、大名行列の人足方という葬儀業者の出自とに裏打ちされた上に成り立っている。

はじめに

(1) 本稿における課題

葬祭業の大手、株式会社公益社が発行した創業七〇周年記念誌には、次のような一節がある。

江戸時代に頻繁に おこなわれていた大名行列はプロの手に委ねられており、駕屋といわれる人々が行列の担ぎ手の手配や行列そのものの演出を請け負っていたのである。しかし、明治維新で大名行列が廃止されたため、職を失った彼らは典礼式典の請負專業者に転業し、生き抜いて行く。明治期の葬列が大名行列、奴の行列と似通っているのは、彼らが大名行列の演出家だったからである。⁽¹⁾

大名行列における奴行列とは、挟箱、毛槍、立傘、台笠などを持った奴姿の男たちが、独特の足運びやかかけ声とともに、それらの道具を投げ渡すなどの所作を伴うもので、大名行列においては見せ場もしくは見どころのひとつであった。

明治時代の大阪において、葬列のなかに大名行列の要素を取り入れていたことや、葬儀請負業のなかに大名行列方から転業したものがいたことについては、戦前から小島勝治が『上方』に掲載の「商都大阪の葬式」(一九三八)で指摘していた。⁽²⁾ また、その小島の仕事については、井上章一が『霊柩車の誕生』(一九八四)で詳しく紹介している。⁽³⁾

井上は、霊柩車が登場する以前、明治期にスペクタクルな葬列を好む風潮があり、そのひとつの趣向として大名行列の奴の芸能を採り入れた葬列があったとする。明治時代に流行した長大化した葬列は、大正に入って近代化のなかで失われてゆく。つまり、市電や自動車とって交通機関が発達しそれが優先されていくこと、そして参列する人々も歩かず

にそういった乗物を利用する事例が増えたこと、また、斎場が郊外に建設され葬列の移動の距離が伸びたことなどがその理由である。そして、霊柩車が登場することになる。葬列における奴行列は、そこで途絶えたことになっているが、さらに井上は、興味深い指摘をしている。

現在も大阪の神社には祭礼に大名行列をくりだすところがある。いまでも、奴たちの行列を見ることは可能なのである。この点について、ある神社に問い合わせたところ、たいへん興味深い事実を知ることができた。そこでは、神事の大名行列を葬儀社の「御奉仕」で演出しているというのである。⁽⁴⁾

筆者は、平成十二年(二〇〇〇)の住吉大社のお田植え祭で、早乙女たちを先導する奴をつとめる大阪供奴保存会の津田慶一会長から、同様のお話をうかがった。井上がいう「ある神社」は、おそらく住吉大社だったのではないだろうか。

小島と井上に共通するのは、葬式といったしめやかな儀式的場に、不釣り合いな派手で華美な趣向として大名行列が採り入れられたことは、近代の大阪の特異性であるといった言説である。井上は、葬列に奴行列がでることについて、葬列が聖なるものから見世物へと転換したという評価をしているが、神事に葬儀社が関わることについては、興味深いとするもののそれ以上の記述はない。しかし、死を不浄とみなし忌避する神社の祭礼で、葬儀に携わることを生業とする人たちが、いずれの場においても奴として一定の役割を担うということは、穢れ多き死の場と、神事の間との間を自在に行き来する身体が存在するということである。このことについてどのような解釈をなすべきか、それは大きな課題である。

(2) つくられた言説の源流、そして身体の論理

これまで、近代の大阪の葬式に奴がでることは、たんに近代における

「近世懐古」「江戸趣味」、あるいは仮装行列としての賑やかしの趣向として認識されてきた。このことは、祭礼行列における奴振りが、これまで十分な考察がなされてこないまま、近代になって始まった時代行列、仮装行列の一趣向としてとらえられがちであったことに似通っている。祭礼行列の奴振りについては、近世には武家の格式を表象する装置として厳然と存在しながらも、一方で、見世物、観賞用の芸能としても評価されており、前者は祭礼警固の武士の行列として、後者は行列風流として祭礼行列に伝えられるようになったことが明らかになっている⁽⁵⁾。

では、大阪の葬式と奴行列との関係は、これまでどのように語られてきたのだろうか。小島は、明治以前の葬式は奴がでるような派手なものはなかったとしている。明治一八年（一八八五）一〇月二日におこなわれた五代友厚の葬儀は長大な葬列ではあったことが知られているが、小島はそこに奴行列があったとは考えていない。むしろ、それ以降にどこかの葬式に偶然とりいれられた趣向であると推定している。

小島の報告は、葬儀請負業者として明治時代の大坂の葬列を担っていた鈴木勇太郎に対する度重なる聞き取り調査の成果であった。その鈴木は、すでに昭和十一年（一九三六）、駕友の歴史と自分の半生を綴った『回顧録』を出版し、家業の繁栄を願って近親および関係者に配布した⁽⁶⁾。鈴木は、『回顧録』に葬式の奴行列については触れていない。大阪で初めて霊柩車を導入し、葬式から奴行列を駆逐したという鈴木にとって、子、孫の代に至る将来の布石として著した『回顧録』だけに、それは当然ともいえる。ただ、自ら語ることにはなかったものの、小島の聞き取り調査では奴について雄弁に物語ったのであろう。鈴木の大坂の葬式における奴行列の知見は、もはや小島を通じて見るしかないが、その限りにおいて鈴木は近世の葬式に奴行列が出ていたとは語らなかった。

小島が、近代に誰かの発案で葬式の賑やかしで奴行列を取り入れたと考えたのは、なぜだろうか。私は、大阪で育った小島は、もともと奴の

でる葬式は大阪の町振であると認識していたこと、そして後に触れるが、河内の布施で見聞した奴の葬式が甚だ個人的な趣向であったことを重ね合わせ、町振りの奴行列の発生を想起したのではないだろうか。もしくは、霊柩車を発案したとされる鈴木勇太郎のようなアイデアマンを前にして、そのような考えに至ったのであろうか。

その後、小説家長谷川幸延は、駕友すなわち鈴木勇太郎と昭和七年（一九三二）に創業した公益社を題材にした「冠婚葬祭」を、『大衆文芸』昭和一六年六月号に発表する。この長谷川の理解も、小島とほぼ同様であった。

大阪で葬送の行列が最も華美を極めたのは明治の末期時代で、日清、日露両役の戦捷景氣の餘波を受けて、彌が上にも豪華を競ふ習慣になつてゐた。さなきだに葬送のことは人生終焉の大儀であるといふ見地から、何時しか世間へ對する見榮のために蜿蜒長蛇の列となり、遂には葬列の中に往昔の奴行列の式まで採入れる様になつてしまつた。⁽⁷⁾

ただし、五代友厚の葬儀の記述に、「思ひのまゝに光箭を截つて大空へ舞上り、燦然たる白光を放つて落下する大鳥毛は、参列の藤田傳三郎をして、『五代は死んで大名になりおつた。儂の葬式の時にも、この男に大鳥毛を振らせたい』と感嘆せしめたといふ⁽⁸⁾」とあり、明治一八年（一八八五）の葬儀に奴が出ていたと解釈していることと、日清戦争（一八九四）、日露戦争（一九〇四）の影響をうけたという記述には、矛盾がみられる。それはさておき、この作品は第五回新潮賞を受賞し、昭和四〇年（一九六五）には東映京都撮影所で制作された映画「大阪ど根性どえらい奴」の原作に採用されるなど、後世に与えた影響は大きかったと思われる⁽⁹⁾。

いずれにせよ、大阪の葬式における奴行列は、近代の大坂の人々が求め、生み出した所産であるとする言説が生まれ、広がっていったことは

確かである。本稿では、その言説について検証することをひとつの課題としている。そして、もうひとつ本稿で明らかにするものは、葬祭業者がいかにして祭礼行列を担ってきたか、聖なる場と穢れの場とを自由に行き交ってきた身体は、いかなる論理に基づいて存在するものであったのかという課題である。

①大阪の葬列における僧列

(1) 僧列に取り入れられた大名列

大阪の冠婚葬祭について調査研究をしていた小島勝治は、商都大阪の葬式を「町振」とし、近隣郡部の地域の身内のなかでも血の濃いものが輿を担ぐ「一族村党のしめやかな葬儀」を「田舎振」と表現した。昭和十二年（一九三七）三月、布施（現在の東大阪市西部）の葬儀請負業者の母堂がお亡くなりになり、自宅から墓地まで約二キロメートルの道のりのかつての「町振」の葬列を模倣したという。小島は次のように述べている。

丁度去年の三月、布施のある請負組の母堂が九十の高齢で逝去せられて自宅から足代の墓迄二十町の道をやつこの行列でゆくと人から聞いて直に駆けつけた。浄土宗蓮信寺の僧籠の前にやつこ一組がついて末寺の僧が人力車で八ヶ寺ついてゐた。その列の後になり先になり一挙一動を見て歩いたことであつた。田舎振からひらけて町振の葬列を模倣してみたのは、この村々にとつても思ひ出深い事件であつたと思ふ。町振の葬儀が早くて経済的な自動車へと移つて行つて、旧の儀式の制度はもう減びかけてゐるのである。⁽¹⁰⁾

大阪に霊柩車が登場したのは大正五年（一九一六）といわれている。⁽¹¹⁾ 小島はこの葬列を見て、幼い頃に見た葬列の印象を甦らせたとあるから、

大正から昭和初期にかけての二〇年余りの間にこのような葬列はほとんど消滅していたことがわかる。その変化の速さは、このような奴振りのある「町振」の葬列が、周辺地域に波及するだけの時間がなかったということもうかがえる。

ところで小島は、この大阪の町振りの行列について「葬列に先立つ僧列に大名列の式をとり入れた」と明言しており、死者を運ぶ輿を中心とした狭義の葬列とは別に考えていた。⁽¹²⁾ これは大変重要な指摘である。小島はさらに「僧迎への列は多い時は百人位で普通のやつこふるの型では三十八人が標準であつた」としており、「僧迎へ」すなわち参列する僧侶を迎えに行く行列があると同時に、僧侶を送る行列もあつたと考えられる。

このように、小島は明らかに葬列と僧列を使い分けており、その意識は副題「特に僧の行列に就いて」にも表れている。民俗学の分野における葬送儀礼の研究には一定の蓄積があり、小島の報告が掲載された『上方』にも、大阪の近隣地域の葬送習俗としてさまざまな野辺送り（広義の葬列）の様相についての報告があつた。⁽¹³⁾ そういった環境のなか、あえて町振りの僧列を取り上げること、その行列が僧列と狭義の葬列に区分できることを意識していた小島は、特異であつたといえる。しかし、この注目すべき点については、長谷川幸延も公益社の社史『葬祭五十年』（一九八二）や『まごころの軌跡』（二〇〇二）でも、さらには井上章一の『霊柩車の誕生』でも見過ごされてきた。唯一、高橋繁行が『葬祭の日本史』（二〇〇四）で、奴振りの所作について「葬列中のべつまくなしにやっていたのでなく、主に僧列が喪家に入るときと出るとき、および墓に着いたときに行われた」と記しているが、奴行列の部分が僧列であるとは認識していない。⁽¹⁴⁾

(2) 僧列の次第

鈴木勇太郎が語り小島が整理した、明治時代の大坂の葬列について、特に僧列を中心に整理してみたのが〈図1〉である。左側が先頭で右が後方、◎と○は人物を表す(○は手替り)。役割ごとの組を表すために、適宜鎖線で囲った。また●は僧侶を表すが、乗物のなかの導師については●では表していない。

①遠見は列から離れて先を歩き、行列の障害があった場合、道筋を変えるなどの役割を持つ。そのため事実上、行列を先導するのは②先払となる。小島は「羽振のきいたもの」としているが、『葬祭五十年』では「実権を持つている者」とある。住吉大社の奴振りを見ると先払の位置に宰領が立ち、恰幅のよい者が堂々と歩くという役わりであるから、権力や勢力というよりむしろ体格の良い見栄えのする者と理解すべきかもしれない。③先箱は、もともと二荷が並んでいたが、道が狭いために縦一列になったという。小島は「伊達箱とも挟箱ともいふが大坂では先箱といふのが普通」とするが、本来は主人より前に位置する挟箱が先箱で、後ろに位置するものを後箱あるいは跡箱という。④大鳥毛は、「股槍を鳥の羽で飾ったもの」とあるが、後に続く⑤毛槍の一種である。毛槍とは、刃の部分を毛鞘に収めた槍の総称で、毛鞘の形状や毛の素材、色によつてさまざまな呼び名がある。大鳥毛は、特に大型のものを指す一般的な呼称である。⑥台笠は陣笠に棒をつけ袋をかぶせたもの、⑦立傘は長柄の雨傘に袋をかぶせたものである。⑧曲長柄は高く投げ上げたり曲芸をしたりする立傘の一種で、その形状は「三寸廻り一間位の長さのみち傘の大きなやうなもの」と記されている。⑨徒士は侍姿の一団である。小島は「一番先を引徒士といひ親分である」としている。⑩打物とは、刀・槍などの武器のことであるが、奴行列では長刀であることが多い。⑪先進僧は、人力車に乗るといふ。導師は⑫乗物すなわち駕籠に乗る。

る。陸尺(昇き手)は四人で手替も四人いたという。乗物の脇には、素襖姿、袴姿、布衣姿の若党がそれぞれ二人つき、さらに伴僧二人も従った。⑬籠の台とは、乗物を下ろすときに敷く台である。⑭杓杖については、言及されておらずよくわからない。これについて高橋繁行は「導師の杖と履き物」と考えている。⑮朱長柄は日除けの傘であり、⑯雨長柄は雨傘である。いずれも導師に差掛ける実用的なものであろう。杓杖、朱長柄、雨長柄については「非常に軽いものである」としている。⑰跡箱は先箱に比べて少し小さいため、二荷並んで歩くという。⑱曲録は僧侶の椅子である。⑲鉢箱には楽器が入っている。⑳合羽籠には手荷物を入れ、中身の合羽は脚立形にかけたものを前後二人で担ぎ、これを㉑雨皮掛という。㉒茶弁当は七輪に土瓶をかけた箱と茶葉や菓子を入れた箱を前後に振り分けて担いだものである。㉓跡押と㉔列方は、後ろ列を見守る役であるが、跡押は落伍者が生じたときに一時代理を務める一方、列方は列が途切れたり休憩時に持物から離れたりしないよう管理監督する役である。いずれも、「古参の者」がとめる。㉕宰領はこれら全体の指揮をとり、人足の確保の責任者でもある。棒頭すなわち葬儀を請負った業者がとめる。

これが導師の僧列とすると、その僧列の規模からして、それ以外にも約一四ヶ寺の僧列が続くという。他寺の僧列は、規模こそ小さくなるものの、先払、先箱、台笠、立傘、徒士、打物、侍、陸尺、籠台、杓杖、長柄、曲録、鉢箱、侍、合羽籠、跡箱、跡押、宰領、といった構成は変わらない。そして、そのさらに後ろに被葬者を中心とする「葬列」が続くことになる。

このような僧列を伴う葬列の構成は、参勤交代の大名行列の構成とよく似ている。それは単に葬列が長大であるといった意味ではない。大名行列の構成は、藩主の行列の前後に、それより小さい家臣の行列がいくつか組み合わさって構成されている。そして葬列もまた、被葬者の葬列

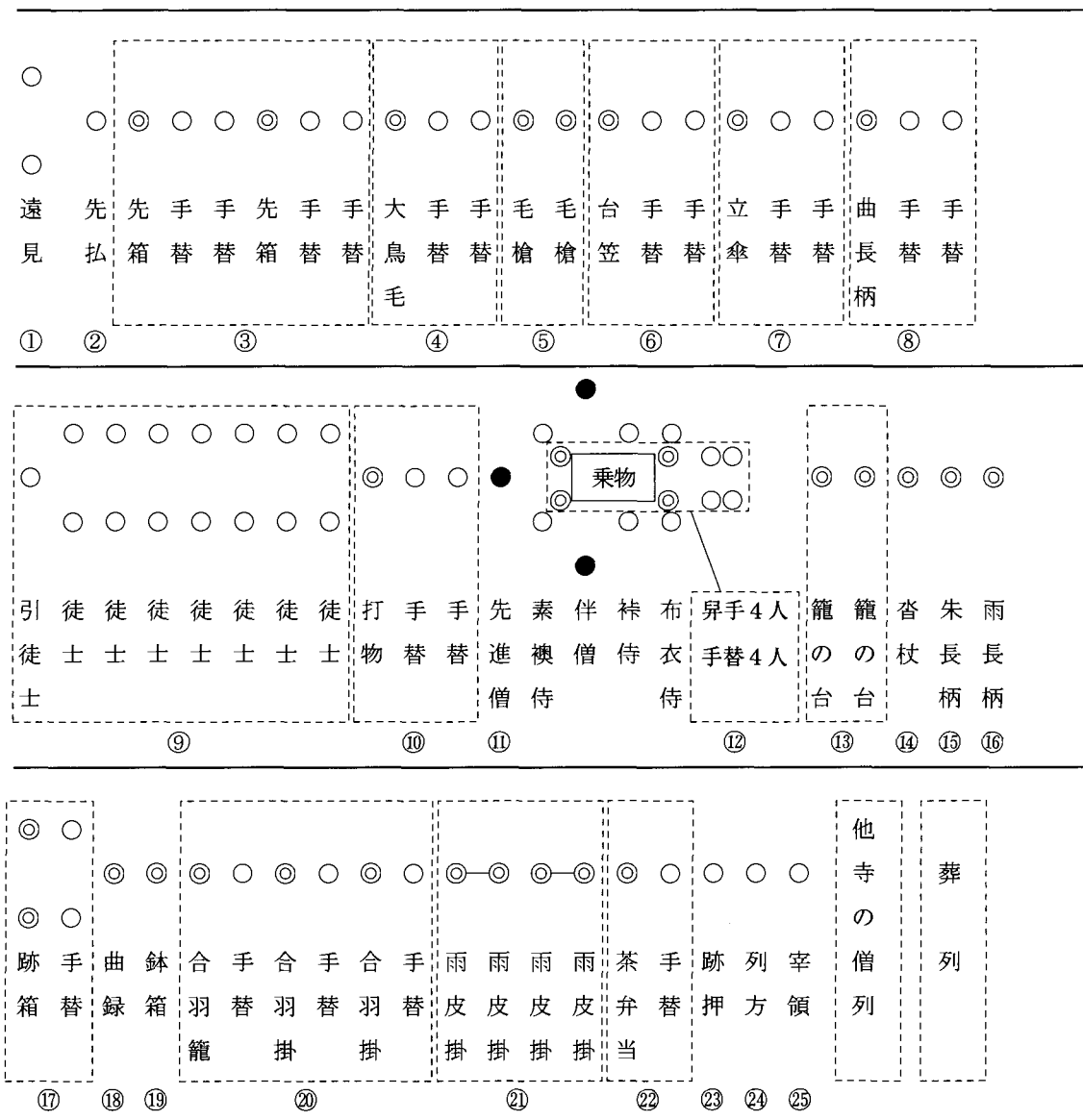


図1 明治期 大阪における葬式の僧列の次第

の前に、導師の僧列や他寺の僧列が配置されたものであり、それらの総体としてひとつの行列の体をなしている。また、被葬者の葬列よりもむしろ、主役は導師の僧列にあったと言えるかもしれない。このことについては、後で述べる川上音二郎の葬列・僧列の様子からうかがえる。

(3) 小結

葬列の構成は地域性が現れるものの、多くは松明や提灯が先頭を飾り、旗や花輪、わらじ、鎌、位牌など死者や鎮魂に関わる葬具、そして棺を伴う⁽¹⁷⁾。もちろん、僧侶などの宗教者の参列もあるが、葬送儀礼を民俗の視点からとらえたとき、それは地域性というよりもむしろ宗教や宗派の問題としてとらえられ、僧列の構成に関してはそれほど注意が払われてこなかったのではないだろうか。

そもそも、奴行列は武士の供揃えとして一般的なものであり、ひとかどの武士が外出する際には、それ相應の供揃えが必要とされており、それが長大になれば行列となり、この風習は武士以外にも準用された⁽¹⁸⁾。葬

儀に参列する僧侶の僧列に奴行列が伴われることは、まず僧侶の格式が高まり、それが被葬者を賛嘆することになる。葬列・僧列における、奴振りは、被葬者である人物の格式を表象させる装置であった。

② 近世の奴振りの諸相

(1) 見世物としての奴振りの成立

奴行列がおこなった所作すなわち奴振りという芸能については、すでに他稿で述べたところでもあるが、その後判明したことも含めて確認しておく。⁽¹⁹⁾ 近世において、主人の格式を表す供揃えとして確立していた奴行列は、一七世紀初頭には挟箱、毛槍、立傘、台笠といった道具をもつ形式がほぼ成立していたと思われる。のちに幕府によって、格式の規定として細かに規制され、統制されることになるが、それはあくまで道具の数と位置についてであって、所作すなわち芸能としての奴振りの成立は、これ以降のことになるだろう。つまり、厳密には奴行列がそのまま奴振りであるとは限らない。

たとえば、慶長一九年（一六一四）以降に成立したといわれる洛中洛外図（舟木本・右隻）⁽²¹⁾では、四条通を西に駆ける武士の一行が描かれており、挟箱、徒士、毛槍、長刀の従者を伴っている。しかし、道具を持って駆ける彼らの姿は、いわゆる奴の衣装や所作もみられない。

狩野永納（一六三一―一六九七）が描いた「賀茂競馬図」（右隻）⁽²²⁾には、二ヶ所で挟箱を持つ奴が描かれている。行列の供先をつとめる奴たちは、後ろに続く徒士らと異なり、視線を前方に定め、足並みを揃えている。その一方で、行列を構成しない挟箱を持つ奴たちは、気ままに歩く様子が描かれていることから、このあたりから奴の足運びは確立してきたのかもしれない。

ケンベルは、元禄四年（一六九一）と翌年の二回、オランダ商館長の江戸参府に加わり、將軍綱吉に謁見しているが、その道中に見聞したことなく、大名行列の奴振りにについての記録がある。⁽²³⁾ そこには、槍を投げ渡す所作こそ記されていないものの、道中の要所所で独特の所作すなわち、腕を水平に伸ばし、足を高く蹴り上げ、毛槍や傘を振り回したり挟箱を揺らしたりする様子がうかがえる。このような奴の所作は、歌舞伎舞踊にも取り入れられており、すでに元禄期の弥之助踊座では若衆の年に達しない子役たちが、槍持ち奴の槍振りの所作をおこなう奴踊が上演されていた。⁽²⁴⁾ のちに、歌舞伎には「奴物」というジャンルが成立することになるが、これらのことから芸能としての奴振りは元禄期には成立していたといえる。

ただし、元禄期以前においても、奴行列は大名行列の象徴として理解されていた。そのことは、明暦年間（一六五五―一六五八）に伊勢でおこなわれた津八幡祭礼の記録からわかる。「勢陽雜記」によれば、津八幡祭礼の出し物のひとつに「大名行列の真似」があり、ほぼ同じ頃に描かれたといわれる「津八幡宮祭礼絵巻」（ニューヨーク本）には、所作をともしない仮装行列としての奴行列が描かれている。この祭礼は現在も「津まつり」として賑わいをみせるが、唐人行列などの出し物が今もみられるのに対し、「大名行列の真似」は早くに廃れてしまった。このことから、奴行列と奴振りの間には見世物としての価値に大きな隔たりがあったことと、芸能としての奴振りの成立時期が明暦以降、元禄以前といった一七世紀後半の四〇年ほどの間に絞られることがわかった。⁽²⁵⁾

現在の祭礼にみられる奴振りは、その由来から三つに大別できる。ひとつは、祭礼行列に参列する神官や警固として出仕する武士の供揃いによるもの、すなわち主人の格式を表す奴振りの系統であり、ふたつめは津八幡祭礼のように見世物としての奴行列、またはそれ以降に芸能とし

での価値を持った奴振りが出し物として取り入れられた系統がある。さらには、明治以降になって、大名行列を懐古してはじまった時代行列の系統が加わることになる。

(2) 近世の近江にみられる奴行列の受容

現在おこなわれている、祭礼における奴振りは、北海道から九州にかけて約三〇〇ヶ所にのぼる事例が確認されているが、なかには集中して伝えられる地域がいくつかみられる。⁽²⁶⁾たとえば、北海道の南部、長野県、石川県、⁽²⁸⁾静岡県、⁽²⁹⁾愛知県、⁽³⁰⁾滋賀県、⁽³¹⁾京都府の丹後地域、⁽³²⁾四国では香川県、愛媛県、⁽³³⁾徳島県、九州では佐賀県、熊本県、大分県、⁽³⁴⁾などである。こういった地域に集中して伝承される奴振りは、衣装や所作といった芸能や由緒や歴史的経緯、名称などに共通する要素が多く、地域的な傾向がうかがえ興味深い。なかには伝承や記録によって伝播の過程が明らかである地域もみられる。

なかでも滋賀県は、近世以降現代に至るまで、奴振りがさまざまな形で受容され、展開をみせた地域である。そして、奴振りと葬式との関わりを示唆する事例もみられる。

滋賀県愛知郡愛荘町豊満に鎮座する豊満神社は、中世には大國郷の中心的な神社であり、今も広い氏子地域を誇る。毎年四月におこなわれる春祭りには、氏子地域が上之郷、中之郷、下之郷の三つに編成され、それぞれ神輿をかついで御旅所（鳥居先の御旅所）へお渡りの行列がおこなわれる。また、六〇年に一回程度、古式大祭がおこなわれ、そのときはさらに離れた別の御旅所（市の御旅所）への大渡りがおこなわれる。この神社の社蔵文書のなかに五つの祭礼行列次第が伝えられており、中世末から明治に至る三〇〇年間の祭礼行列の軌跡がわかる貴重な史料である。⁽³⁵⁾

このなかで最も古い天文二四年（一五五五）の「豊満大明神御渡り次

第」と、次の元文五年（一七四〇）の「古例ヲ以神事定書」は、ともに箇条書きに近い形式であり、祭礼行列の構成もよく似ている。その後の天保十一年（一八四〇）、嘉永六年（一八五三）、明治一四年（一八八二）の三つの〔祭礼行列次第〕は縦に長く、模式図の要素を含む行列次第書であり、このうち天保十一年と、嘉永六年の〔祭礼行列次第〕には、挟箱、立傘、台笠、毛槍、といった奴行列が記載されていた。豊満神社の奴行列は、御幣及び神主・神子の供揃えであると同時に、その大半を子供が担うことから、格式を表象する機能とともに、賞玩用の役割を兼ね備えていた可能性もあり、興味深い。それはさておき、豊満神社の祭礼では近世にはいっても少なくとも元文五年までは中世的色彩が強く残っており、それ以降、天保十一年までの一〇〇年の間に奴行列の受容がなされた。そして、明治の早い段階で近代的展開がされ奴行列はみられなくなったことから、豊満神社の祭礼においては、奴行列はまさしく近世的な要素であったといえる。

この豊満神社の氏子であり、中之郷を構成する愛荘町東円堂では、かつて葬式に奴行列があったと伝えられている。東円堂公民館で編纂された字誌によれば、この地域の伝統的な葬儀役人付は、辻火、先火、盛物、三具足、寺方、提灯、輿、賄方、帳場、といったもので、江戸時代からそう変わらないといわれている。⁽³⁶⁾このうち、寺方については、文政十三年（一八三〇）の信光寺住職龍音の葬儀の記録では「寺人足」とあり、その内訳は「竹杖二人、先箱二人、立笠一人、乗物六人、曲録一人、杵籠一人、挟箱一人、後箱二人、竹馬一人」であった。⁽³⁷⁾被葬者の棺は輿であることから、乗物は導師（僧侶）が乗るものであろう。また、曲録は導師の椅子である。つまり、龍音の葬列には、棺を中心とする葬列のなかに、導師を中心とする寺人足による行列、すなわち僧侶が組み込まれており、そこには導師の格式を象徴する奴行列があったことがわかる。

(3) 葬列における御導師人足

信光寺住職の葬儀に「寺人足」とあったように、近江の湖東地域において近世期における葬列に奴行列が伴うことは、珍しかったかもしれないが、少なくとも奇異なものではなかった。

豊満神社の氏子地域に隣接する愛荘町愛知川は、中山道の愛知川宿として栄えたところであり、その中心部には、真宗大谷派の中本山であった寶満寺がある。寶満寺はかつて豊満寺と称し、豊満神社の別当寺として神社に隣接していたが、のちに寺地を移し、宗旨替えをしたという。その寶満寺に隣接する等覚寺は、やはり真宗大谷派であり、乗船寺（現在は廃寺）とともに、寶満寺と大変深い関係にあった。この等覚寺には、近世の葬列に関する記録が伝わっており、大きな葬儀に奴行列があった様子がうかがえる。⁽³⁸⁾

安政二年八月二十二日 弥次右工門の葬儀

八月廿二日 釈道亭 町 弥惣兵衛父

弥次右工門事七十五才

同人廿一日夜ヨリ急病ニテ廿二日夕方■(丑) 其由吉右工門註進直ニ

三部経読誦 廿三日朝為悔 御院主様御出先例也

其節一山御供小経 廿四日葬式是又先例としテ

輿附有之由ニ付為代右門と仰付蒙附情買ニテ

輿供廟所ニテ焼香有之當寺ハ法服七條灰葬ハ例通

廿五日朝仕上之弁先例之通御院主御参■観經

葬式行列之事

先箱四人臺傘二人立傘二人御駕籠六人長刀二人侍二人役僧式人供二人合羽駕一人きん臺壺人弁当壺人曲録壺人

大蔵卿様行列之事

先箱式人駕四人侍壺人立傘壺人役僧壺人供式人曲録壺人

(■は判読不能。以下同じ)

この史料には、安政二年(一八五五)八月二十二日におこなわれた成宮弥次衛門の葬儀で、先箱が四名、台笠二名、立傘二名、御駕籠六名、長刀二名、侍二名、役僧二名、供二名、合羽駕二名、鑿台一名、弁当一名、曲録一名がでるという豪華な「葬式行列」の詳細が記載されている。さらには、そこに参列したと思われる大蔵卿なる人物の行列、先箱が二名、駕籠四名、侍一名、立傘一名、役僧一名、供二名、曲録一名であるが、成宮弥次衛門の葬列はそれよりも格が上であった様子がわかる。

享年七五歳とある成宮弥次右衛門は、増水時に死者をよく出して「人取り川」とも呼ばれた愛知川に、無賃で渡ることができた橋をかけた、愛知川宿の名士である。天保二年(一八三一)完成したこの無賃橋は、歌川広重の描いた「木曾海道六十九次之内 恵智川」にも描かれている。ほか、建設工事の模様を描いた「架橋絵巻」が成宮家に伝わっている。⁽³⁹⁾

さて、この行列にみられる先箱、台笠、立傘は大名行列にも共通する奴行列の要素である。長刀、合羽駕、弁当もそれに準じるものと考えられる。御駕籠は導師の乗物で、役僧は導師の従僧である。法具である鑿を載せる鑿台、導師の椅子である曲録は、僧侶の行列固有の役柄である。ただし、被葬者である成宮弥次右衛門が乗る輿が、この「葬式行列」にはみあたらない。次の史料と考え合わせて、ここでは「葬式行列」と表現しているものの、東円堂の葬儀役人付というところの「寺人足」の部分だけの記録と考える方が自然であろう。

安政三年六月八日 八坂善敬寺殿女隠居葬式

六月八日 八坂善敬寺殿女隠居葬式ニ付

御導師人足不残御迎ニ而當方ヨリ御供

之分両寺役僧三人侍式人仲間式人御迎人足

御駕六人先箱四人立傘壺人臺傘壺人後箱

式人并当式荷合羽駕式荷両掛式荷棹持人

御宿弥左工門方 御着後直煩御悔ニ御出■御■行

両寺共も御同体者香儀式■相■申当日おりくの

夕立殊ニ迷惑ニ而併御葬式之間ハ明リ二相成申候

これも、同じ史料から引用しているが、安政三年（一八五六）六月八日におこなわれた彦根市八坂の善敬寺の女隠居の葬儀の記録である。「御導師人足」として、御駕六人、先箱四人、立傘一人、台笠一人、後箱二人、并当二荷、合羽駕二荷、両掛二荷、棹持一人という構成に加え、八坂までの「御迎人足」として役僧三人、侍二人、仲間二人が加わったことがわかる。

ここでは、成宮弥次右衛門の「葬式行列」と多少構成が異なるものの、被葬者の行列を含まない行列について「御導師人足」という表現がなされている。「葬式行列」と「御導師人足」は、いずれも僧列であったのではないだろうか。そのことは、次の記録にもいえることである。

安政六年二月二四日 八坂善敬寺殿奥方葬式

二月廿四日 八坂善敬寺殿奥方葬式

御導師此方ヨリ御供ノ分拙寺乗船

役僧三人侍式人仲間三人引戸駕人足二人

右ハ堀村妙徳寺殿迄夫ヨリハ八坂迄ハ御迎

人足 行列ハ

先箱四人立傘式人臺傘式人駕六人後箱式人

合羽駕式荷并当式荷曲録人棹侍人

両掛式荷此方ヨリ持参

御宿弥左工門方今日ハ延刻ニ付御■後御悔■行

両寺共役僧式人侍式人供式人香儀式勿相納

出棺勤行ハ定例之通路念佛モ同様廟所之

勤行正信偈中■念仏三重上五ハ■和賛ハ

真実信心ウルヒトハヨリかけ■知■ノ不■茂■

安政六年（一八五九）二月二四日には、彦根市八坂の善敬寺の、今度は奥方の葬儀があった。「御迎人足」は役僧三人、侍二人、仲間三人、引戸駕人足二人であった。「行列」は先箱四人、立傘二人、台笠二人、駕籠六人、後箱二人、合羽駕二荷、并当二荷、曲録一人、棹侍一人、両掛二荷である。女隠居の葬儀に比べて、立傘と台笠の人員が増えているから、奥方の葬儀は格式を少し高めたのだろう。

役僧についてであるが、安政三年には「両寺」、安政六年には「拙寺乗船」とあり、寶満寺と関係が深い等覚寺と乗船寺の両寺を指すのであろう。また、次に紹介する文久元年の記録にある「本坊」は寶満寺を指すと考えてよいだろう。

文久元年十月十日 釈宗節 町 主殿事五十九才の葬式

右行列附

先箱四人 臺傘式人 立傘式人 駕籠六人

打物人

後箱式人 供式人 きん臺人 曲録人

合羽駕人 并當人 棹侍人

侍式人

拙寺式人 乗船寺人 本坊役僧式人

文久元年（一八六一）といえば、天皇家より和宮が一四代將軍家茂に嫁ぐため、江戸に下向した年である。主殿の葬儀は、ちょうどその通行にあたり、そのため一〇月一〇日の葬儀は身葬のみおこない、翌十一日夜に剃刀、十二日夜に密葬を済ませ、本葬は宮様御通行後にとりおこなったという。地域によっては、参勤交代の大名行列の通行に際して徴発された人足たちが、祭礼行列の奴振りを担うという伝承もみられる。はたして、愛知川宿では、和宮の通行に際してはどうだったのか、葬式の奴行列とは担い手が異なっていたのか、気になるところである。

この等覚寺の記録では、このほか文久二年に二例、奴行列が伴う葬式が記載されている。

文久二年六月廿一日 良■二男 ■次良事廿才の葬式

行列付

先箱二人 駕四人 きん臺曲録

合羽駕

文久二年八月六日 弥次右衛門娘 フサ十一才の葬式

葬式行列

先箱式人 駕籠四人 きん臺曲録合羽駕都合拾老人

愛知川宿を代表する人物の盛大な葬儀に際してこのような記述がなされ、それ以降、その一族や僧侶などといった名士、名門の家柄の葬式や特別な事情の葬式にのみ、このような記述がなされている。⁽⁴⁰⁾

もちろん、このような大きな葬式をあげることができたのは、中山道の宿場町として繁栄していた愛知川宿という土地柄にもよるし、たまたま等覚寺に筆まめな住職がいたことも大きい。また、祭礼行列に奴振りがみられた豊満神社との関係も考慮にいれるべきであろう。

ところで、このような奴行列をとまなう大掛かりな葬式は、当然、すべての葬式におこなうようなものではなかった。この等覚寺の記録は、文化一〇年（一八一三）より始まっているが、安政二年の成宮弥次衛門の葬儀以前には行列（僧列）の記述はみられない。このことは、この地域における奴行列の受容の時期を考えるうえで重要である。

(4) 小結

近世の近江における地域の奴振り受容の実態は、祭礼行列に奴行列が取り入れられるだけでなく、それと並行して葬列の僧列においても奴行列がみられるといったように、さまざまな展開をみせていることが明らかになった。滋賀県には、このほかにも僧列に奴行列がともなう事例が

みられるので触れておく。

米原市長沢にある福田寺は、浄土真宗本願寺派の寺院で長沢御坊とも呼ばれている。蓮如上人お手植えと伝えられる松があり、戦国時代には、覚芸が湖北一〇カ寺の信徒を率いて織田信長と戦ったとも伝えられる古刹である。幕末、福田寺二十二世三乗院撰専（本覚）のもとに井伊直弼が仲人となり、二条斎敬の妹鑰子が嫁いだ。その際の嫁入り行列に奴振りがあったことから、福田寺では毎年秋の報恩講には奴振りをおこなうようになり、現在も「福田寺の公家奴」として続いている。⁽⁴¹⁾ ここでおこなわれる奴振りとは、報恩講の法要に参列する住職の格式をたかめる供揃えの行列であり、二条家からの嫁入りを契機に娶った住職の格式を奴行列によって表すことになったといえる。僧列の奴行列が今に伝わる貴重な事例である。同じく米原市能登瀬の善性寺は、近世から明治四年（一八七二）まで、毎年三月に祈禱札を宮中へ献納することが恒例だったという。その献納の道中には、奴がついたと伝えられており、その奴を善性寺奴もしくは青木奴と呼んでいた。現在は、善性寺と関係が深かった山津照神社の祭礼行列に取り入れられ、「能登瀬の武家奴」として続いている。⁽⁴²⁾ この奴も、武家奴という名称ではあるものの、その歴史的経緯から僧列につく奴行列であったことは明らかである。

等覚寺や信光寺の事例からは、盛大な葬式をとりおこなう場合、導師となる僧侶の格式を高める僧列が組まれることが明らかである。そして、その背景としては、奴行列は高い格式を表現するための通常的手段として、武家だけでなく時には僧侶の行列にも用いられてきた。

明治以降、等覚寺や信光寺、あるいはその近隣の地域でおこなわれた葬式で、奴行列があったかどうかは定かでない。ただ、近世後期から幕末期において、近江においては葬式に伴う僧侶の行列として奴行列があったことは、近代の大阪の葬式の奴振りが、突飛な思いつきで始められたとする言説を否定するには十分であろう。

③大阪の葬祭業者と供奴

(1) 川上音二郎の葬列と僧侶

近代の大阪に話を戻そう。大阪の葬式に奴振りが取り入れられた時期については、はっきりとしたことはわかっていない。篠崎昌美は『浪花夜ばなし』(一九五四)で、明治になって人力車が台頭するなかで駕籠屋が衰退していくが、医者や僧侶だけは駕籠を使う慣習が残っていたという。また、葬儀の時に棺を運ぶのも駕籠であり、そこで参列する僧侶も駕籠を用い、大名行列道具を飾り立てたとしている。しかし、やはり奴振りが取り入れられた時期については明言していない。⁽⁴³⁾

長谷川幸延の小説では明治一八年(一八八五年)の五代友厚の葬儀に奴行列があったとするものの、その証拠となる史料は確認できない。しかし、少なくとも明治四四年(一九一一年)十一月一日に大阪でおこなわれた川上音二郎の葬儀には、奴振りがあったことが確認できる。川上音二郎は、世情を風刺した「オッペケペー節」で有名な人物であり、書生芝居の流れを汲む新派劇のリーダー的存在であった。その葬儀の様子は、大阪毎日新聞に掲載されている。

午前九時半當日の導師前田聴典師其他十四ヶ寺の僧侶が練りこんで来た―(中略)―先供の金紋扶函、長柄、朱傘に乗物をつらね警筆の聲に両側の群衆を拂つて練りこんで来た僧侶は金襴緞子の袈裟を秋雨の晴間の日影に耀かし緋衣紫衣に錦の僧冠嚴かに帝國座へ練りこんで舞臺にかゝつて正座す⁽⁴⁴⁾

葬儀当日の朝、川上音二郎の棺は彼自身が建てた帝國座の舞台に安置されており、妻で新派劇のスターであった川上貞奴ら親戚縁故のものたちが居並ぶなか、葬儀をおこなう一心寺の僧侶たちが到着した場面であ

る。ここで注目されるのは、導師の「僧侶」の記述であり、挟箱、長柄といった奴が先頭に立つて警筆の声をあげていたことがわかる。新聞の紙面では、「僧侶は金襴緞子の袈裟を秋雨の晴間の日影に耀かし」の部分が一際大きな文字となっており、僧侶の華やかさを強調している。大阪毎日新聞が大文字で強調しているのは、当時の大スターである貞奴に関する記述がほとんどであったが、きらびやかな衣装をまとい、奴振りを伴って入場する導師たちの行列はそれに匹敵する見どころとして、マスコミが理解していたことがわかる。⁽⁴⁵⁾ 奴振りは、導師たちを先導する役として帝國座に乗り込み、帝國座での読経讃偈の後、葬儀がおこなわれる一心寺にむけて出発する葬列の先頭を飾った。その葬列は長大で、棺が帝國座を出るときに先供は新町橋まで到達していたという。⁽⁴⁶⁾

このような華美で長大な葬列が生まれた背景について、比経啓助は明治という時代的特徴によるとした。明治四年(一八七二)の鍋島閔叟の葬式は、貴賓の人々で初めての神葬祭であった。比経は、そもそも神葬祭は宗教的な厳肅さに欠けており、副島種臣によって元佐賀藩主の威厳を損なわない工夫がなされたという。それは、軍隊の動員し、在日の外交官を招き、大勢の会葬者を参列させて葬列を盛大にすることで威儀を保つ方法であった。その世俗的な指向は、虚飾を廃するよう遺言した福沢諭吉の葬式(明治三四年)にも、宗教的儀式を拒み「告別式」という形式を編み出した中江兆民の時(明治三四年)にも、「長い行列」として発露した。また、その影響は仏葬式にも及んだという。⁽⁴⁷⁾

川上音二郎の仏葬式の葬列も、献花された花車が二〇〇を超えるなど「長い行列」であり、明治時代の有名人の葬式としては当然のものであった。そういった近代的要素を含みながらも、その一方で、僧侶に奴振りを伴うことで導師の格式を高めるといふ、近世的要素もあわせもつていたことは興味深い。近代の大阪の葬列が持つ特異性は、この近代的展開のなかに、あえて近世的な要素である奴振りを組み合わせたという妙で

はなからうか。

(2) 大阪の葬祭業者の出自

川上音二郎の葬式がおこなわれるまでに、大阪の葬式で奴振りがあつたという記録はまだ見つかつていない。⁽⁴⁸⁾しかし、これまで大阪の葬列に奴がでていたことは、明治になって大阪の人が考え出したアイデアであるという理解は疑ってかからなくてはならないし、少なくとも近世と近代とは、連続してとらえていかねばならない。

近代における大阪の葬式で、僧列の奴をふくめ葬列全体を取り仕切ったのは、葬儀請負業の人たちであつた。⁽⁴⁹⁾小島勝治は、その業者のひとりである鈴木勇太郎への聞き取り調査から、葬儀請負業の源流を、近世の生業から諸人足請負業、医者陸、遊女の送迎駕、大名行列方、四つに分類した。⁽⁵⁰⁾

鈴木勇太郎は、小島の分類では四つめの大名行列方にあたる。鈴木の家はもともと近江屋もしくは近友といい、延宝年間（一六七三―一六八一）に大坂天満に本宅を置き、神社仏閣、町奉行、与力などへの人足用達を生業としていたが、のちに江戸に本店を設けて参勤交代や江戸城登城などの人足をも取り扱っていた。明治になって江戸の店をたたみ、大阪で駕諸人足請負業として再出発し、明治八年より駕友と改称している。近代になつても、旧来からの神社仏閣への出入りは続いており、ひとたび典礼式事となると他の駕人足業者の協力も得つつ人足を取り仕切る関係にある寺院は、三〇余りあつたという。明治四年（一八七二）生まれの鈴木勇太郎も、小学校を卒業と同時に寺侍や提灯持ち、陸尺として家業に携わってきたが、明治一六年（一八八三）より葬具貸物業を兼業することとなつた。⁽⁵¹⁾葬具貸物業とは、近世期には「貸色屋」「乗物屋」と呼ばれ、葬儀の際に入用の白張提灯や、棺とそれを載せる乗物、墓所に供される盛物や飾り一式、喪服となる麻袴などを一時に用立てる人々で

あつた。⁽⁵²⁾

駕友が葬具貸物業をはじめた明治一六年（一八八三）に、大阪市内に二〇数ヶ所の支店をもつ大阪葬具株式会社とその他の業者との間で対立がおこつた。大阪葬具株式会社とは「いろ屋」すなわち葬具貸物業者の連合による組織で、どうやら駕人足業者を傘下に囲おうとしていた。一方、駕友は駕市（葬具貸物業と兼業）、八百勘といった駕人足業者の協力を得て、この難局を乗り切っている。この時、大阪葬具株式会社の傘下にあつた駕人足業者は一〇業者あり、対立する葬具貸物業者は十一業者、うち駕人足業者との兼業は駕友のほか五業者であつた。⁽⁵³⁾

このように、明治の中期には駕諸人足請負業と葬具貸物業とは別ものとして考えられていたが、昭和になる頃には区別がなくなった。また、葬具貸物業者の数は、明治の中ごろには四八業者だったが、大正初期には一四二業者に増加し、回顧録を記した昭和十一年（一九三六）頃には六〇〇を超える同業者があつたという。⁽⁵⁴⁾

葬儀請負業は、関西では一般に「ソウレン（葬斂・葬礼）屋」と呼ばれ「駕」の字がつく業者が多く、東京では「輿屋」「桶屋」と呼ばれ「桶」の字がつく業者が多い。⁽⁵⁵⁾鈴木が明治一六年の事件に関わって記した業者の中にも駕市、駕友、といった駕人足業を思わせる屋号がみられる。

平久こと平野屋久兵衛は、江戸時代には大坂城の足軽頭であつたが、明治以降は、島之内（南区島之内）にあつて水屋を経営したという。⁽⁵⁶⁾平久は、この島之内を縄張りとし、毛馬の閨門から水を運んでいた。夜中二時ごろ大八車に積み込み、朝八時ごろまでかかって配り歩いた。島之内には、地下水脈が一本しかないといわれており、恒常的に水不足だった。⁽⁵⁷⁾平久は、平野家が絶えたあと、津田佐吉（初代）、喜三郎（二代目）、そして現在は 三代目慶一氏（昭和九年生）が跡をついでいる。水屋は、昭和十一年（一九三六）に亡くなった津田佐吉の代までおこなつていたという。また、島之内以外の地域には、別の水屋の縄張りがあつたとい

う。⁽⁵⁸⁾多くの足輕を束ねた平久が水屋を始めた理由は、人手が必要な事業であることに加え、家々の御用聞きができるからだという。氏神祭礼には家々の表に提灯を掛けるが、それが破れて急ぎ調達してほしい場合、あるいは婚礼を迎えた家の諸準備、たとえばかんざしが必要とか足袋が何足といったことがあれば、晩に家の表に札を掛けておけば、夜中に水屋が確認し、朝になってから御用をうかがったという。その諸事御用伺いは、やがて急な不幸に対しても、葬儀の差配といった形で請け負うことになった。

現在も、大阪の葬儀社には、葬具貸物業者に由来すると思われる「乗」「輿」の字がつく業者のほか、「駕」「花」「水」など、駕人足業、花屋、水屋にまつわる屋号が多い。しかし、それら全てが駕人足業、花屋、水屋から転じたとは考えにくい。おそらく、駕人足、花屋、水屋らが葬祭業者に転じた例が多かったことが、のちに「乗」「輿」と同様に「駕」「花」「水」の字を用いた屋号が葬祭業者にふさわしいと認識され始めたのではないだろうか。

なお、本稿の末尾に参考資料として、大阪の葬祭業者一覧をあげたので参照されたい。

(3) 棒頭と宰領

大阪で奴振りを伝えていたのは、近世に大名行列方であった駕友や、大坂城の足輕頭をしていた平久であった。彼らは、葬祭に携わるだけでなく、日ごろから神社仏閣などへ出入りをしており、それらの棒頭を勤めていたという。⁽⁵⁹⁾

棒頭とは、寺社などの帳簿方から、日ごろ諸事相談を受け、頼りにされている存在である。祭礼や法事、葬儀などになると、棒頭が適当な業者をみつくりつつ宰領として下請けさせ、宰領はさらに孫請けなどとして人足を確保する。また、棒頭が宰領をかねる場合もあった。

大阪天満宮（北区天神橋二丁目）や住友財閥の棒頭として活躍していたのが駕友、御霊神社（中央区淡路町四丁目）は熊田屋、難波神社（中央区博労町四丁目）は阿波弥、熊野神社（東成区大今里四丁目）や三津寺（中央区心斎橋筋二丁目）は平久、住吉大社（住吉区住吉二丁目）は芋忠が棒頭をつとめていた。そのほか、明石屋もどこの社寺で棒頭を勤めていたという。また、阿波弥は駕友のもとで宰領を勤めていた。⁽⁶⁰⁾

平久が棒頭として采配をふるった例に、平成一〇年（一九九八）におこなわれた三津寺の晋山式がある。三津寺は、大阪市中央区心斎橋筋二丁目にある真言宗御室派順別格本山で、御堂筋沿いに戦災を免れた鉄筋コンクリート造の庫裏が建っている。晋山式は、新住職が山（寺）に晋（進）むということから、お練り行列が仕立てられるが、この三津寺のお練り行列では奴振りを伴った。この行列は道頓堀橋北詰の交差点に建つホテルから出発し、御堂筋西側を北上して御堂筋八幡町で東側に渡り、三津寺筋まで南下するというおよそ三〇〇メートルの行程であった。人員は平久が直接あるいは下請けを通して確保した。また奴振りは、大阪供奴保存会のメンバーが担った。このときに使用した奴の道具や住職が乗る駕籠などは、庫裏の倉庫に収められており、そういったことまで、棒頭は把握していたという。⁽⁶¹⁾

棒頭や宰領を頭とする下請け、孫請けの形式は、葬式においても同様であった。喪家から葬式を請け負うと、親方はその葬式の棒頭となり、人足の確保をする。その際、芸を伴う奴にはそれなりの人材を確保する必要があるが、一方で頭数さえ揃えば良い役割もあり、棒頭にはそれを見極めてマネジメントする力量が必要であった。⁽⁶²⁾

近世における葬具貸物業者においても、ここである棒頭のように、寺の出入りをしていた事例がある。千日前で葬具貸物業を営んでいた山田屋は、千日前墓所の会所に行つて葬式の世話をするだけでなく、六坊（千日山安養寺を構成する寺院）に日常から出入りし、さまざまな打ち

合わせをしていた。千日前に大阪市中の人を呼び込むため、法善寺に墓のあった笠屋三勝の法会を催すことを企画し実行したのは、この山田屋であるという。⁽⁶³⁾

また、その頃は葬具貸物業者の間においても、力関係は厳然とあった。千日前の墓所に向かう葬列が無常橋のところで行き当たると、難波で葬具貸物業を営む駕甚の棒頭は「難波」の一声を発し、相手方の葬列は道を譲ったという。この優先権とは、被葬者の家柄ではなく、葬具貸物業者の力関係によるものであった。⁽⁶⁴⁾

寺社出入りの棒頭や宰領を頂点に、下請け、孫請けが重なる構造は、より古い時期の千日前墓所における六坊出入りの山田屋や、他の業者から一目置かれていた難波の駕甚といった事例に、その片鱗がうかがえるのではない。いずれにせよ、葬祭に関わる業者が、寺社などで葬祭以外の役割も担っていたことは明らかである。

(4) 大阪の供奴

かつて大阪では、住吉大社だけでなく、難波神社、熊野神社、杭全神社（平野区平野宮町）などでも、祭礼行列に奴振りがみられたという。平久の津田慶一氏の関わってきた事例を紹介しておく。

難波神社の夏祭りは氷室祭とも呼ばれ、毎年七月二〇日頃におこなわれる。製氷会社から奉納される氷柱をかり割って参拝者に授与することで知られ、この氷を食べると夏負けしないといわれている。この祭りでは、堀江の御旅所までのお渡り行列がり、そこに奴がでていたという。その様子は、昭和三十三年（一九五八）七月に映された8ミリフィルム⁽⁶⁵⁾からうかがえる。そこには騎乗の神職や御鳳輦、神輿とともに、新町の芸妓連や獅子、そして奴振りの姿がとどめられていた。奴は、難波神社の紋が入った法被姿で、挟箱、毛槍の持ち替えの所作に加え、長柄傘を使った曲芸を披露する奴もいた。奴振りの行列は、新町や堀江、久宝寺

などを通り、沿道に家や店舗から所望されて奴の所作をしては、ご祝儀をもらっていたという。⁽⁶⁶⁾（写真1、2、3）

熊野神社の夏祭りの渡御行列でも、奴振りがみられた。昭和三十八年（一九六三）七月一七日の行列次第には、先弘、先箱、毛槍、大鳥毛からなる奴振りがあった。先弘は宰領が兼務し、先箱、毛槍、大鳥毛を「手廻り」と称していたこともわかる。⁽⁶⁷⁾（写真4）

現在、大阪で定期的におこなわれている奴振り行列は、住吉大社のお田植祭だけである。住吉大社では、七月末の夏祭りに神輿が大和川を渡るというお渡り行列があり、その先導に奴振り行列がでていたが、そのお渡りができなくなったことから奴も中断してしまった。その後、住吉大社の要望もあって、お田植え祭りで早乙女先の先導として、奴がでるようになった。その際、帝塚山芋忠の神並寅太郎が役買い、それ以降、奴振り行列の宰領役は帝塚山芋忠から出すことになった。なお、お田植え祭りの行列には、武者行列もあり、もともとは棒頭の芋忠（住芋・芋忠本店）⁽⁶⁸⁾が取り仕切っていたという。

これら平久の活躍した大阪ミナミの奴振りに対して、駕友が伝えてきた大阪キタの奴振りについては、よくわかっていないが、北区天神橋筋二丁目花重の看板をあげていた寺井尚孝は、「大阪でも北と南とは、行列の内容はちがいます。北が少し派手でしょうね」と語っていることから、芸態

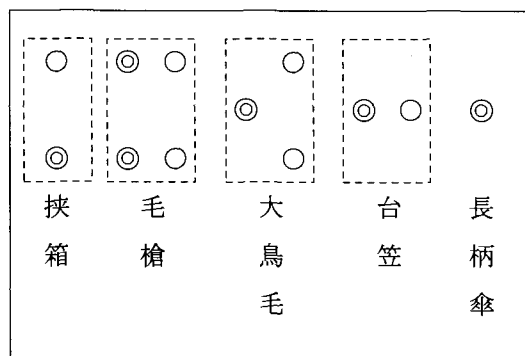


図2 昭和33年 難波神社の奴振り
（津田慶一氏所蔵8ミリフィルムより復元）
※左が先頭、右が後ろ

がことなっていたことがわかる。天神祭では、昭和三〇年頃までは奴振り行列がでていたというが、それは駕友らによる奴振りではなく、平久らに依頼しておこなったミナミの奴振りであつたらしい。昭和三八年（一九六三）七月二五日の渡御行列の史料が平久に残されており、平久の津田喜三郎が天神祭に携わっていたことがわかる。⁽⁷⁰⁾ただし、その時期にはすでに奴振りはみられなくなっていた。その後も『回顧録』を著した鈴

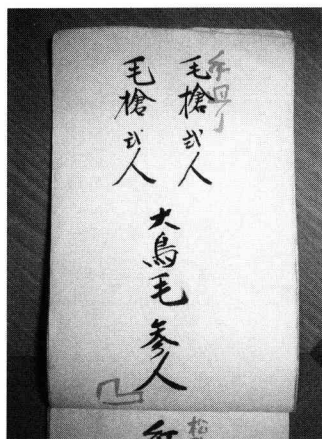
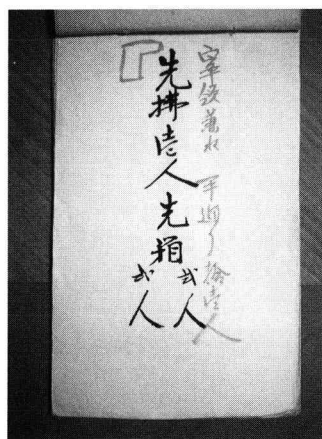


写真4 昭和38年「熊野大神宮渡御」より奴振りの部分

昭和七年（一九三二）、葬祭用具の製造販売をしていた小山徳松と葬儀請負業の大為こと藤井長三郎らによって、公益社（東区北浜三丁目）が発足した。⁽⁷³⁾その後、公益社は戦時の経済統制の影響も受け、吸収合併によって規模を拡大していく。これに対して駕友も他の業者と協力して

たのではなかろうか。遅くとも昭和初期までには、キタの奴振りは途絶えてしまったと考えられる。

木勇太郎とその子友次（太右衛門）、孫而良までは大阪天満宮の天神祭で活躍していたというから、天満宮の棒頭としての役割は続いていたのだろう。
駕友の鈴木木勇太郎は、大正四年（一九一五）に大阪でいはやく霊柩車を取り入れ、大正七年には宮型霊柩車を考案するなど、大阪における葬祭業の改革者でもあった。奴振り行列を伴う壮大な葬列から、葬列を廃して霊柩車へ転換した駕友は、それと前後して祭礼行列の奴振り行列からも手を引いたのではなかろうか。遅くとも昭和初期までには、キタの奴振りは途絶えてしまったと考えられる。



写真1 昭和33年 難波神社の奴振り
毛槍を振る様子（津田慶一氏所蔵8ミリフィルム）



写真2 昭和33年 難波神社の奴振り
長柄傘の曲芸（津田慶一氏所蔵8ミリフィルム）



写真3 昭和33年 難波神社の奴振り
橋の上は所望がかからないため歩く（津田慶一氏所蔵8ミリフィルム）

大阪葬祭自動車統制株式会社を設立したが、やがて公益社に吸収された。⁽⁷⁴⁾とはいえ、駕友の事務所は公益社の一営業所となったが、その後もしばらくは「駕友」と書かれた木の看板が掛けられていたという。⁽⁷⁵⁾実際、昭和24年の「大阪市規格争議取扱店名簿」にも「駕友・鈴木而良」の名前があがっている。⁽⁷⁶⁾このように合併を経た後も昔の看板も出している例は、大阪の葬祭業者には多くみられることである。なお、鈴木而良の子は葬祭業をつがなかったため、駕友の伝統は途絶えた。

現在、大阪の奴振りを伝承しているのは、平久の津田慶一氏が会長をつとめる大阪供奴保存会である。もともとは、ミナミの奴のグループであり、葬祭業者の有志で占められていたが、近年は他業種の人も参加している。⁽⁷⁷⁾

会長の津田慶一氏が保管している大阪供奴保存会の事務文書をひもとくと、もともと「奴会」と称していたが、昭和五〇年代になって「供奴保存会」の名称が使われるようになったことがわかる。このことについて津田慶一氏は、住吉大社のお田植え祭りが国の重要無形民俗文化財に指定（昭和五三年）されたことから、その一翼をになう奴を伝統文化として保存する意識が働いて「保存会」を名乗るようになったという。

(6) 小結

葬儀の看板を掲げている平久も、葬儀のない時はさまざまな仕事をしていた。津田慶一氏の父、喜三郎は二階で事務所を持ちながら一階では喫茶店を開いていたし、日ごろから花街組合や旅館組合などに入ったりしていたという。喜三郎は、南五花街組合という南地（宗右衛門町・九郎右衛門町・櫓町・阪町・難波新地）のお茶屋や置屋の組合に行つては、見番の雑用をしたり、大和屋などの大きな料理屋の手伝いをしたりしていた。そういった関係を日常的に維持することで、いざ人手が必要な行事には宰領として振舞うことができた。十日戎に出る南地芸妓による宝

恵駕行列には、喜三郎の跡を継いで慶一氏が宰領を任かされた。⁽⁷⁸⁾また、婚礼がある家があれば簪や足袋などの急な入用の調達を世話したり、地域の祭りでは家の門につる提灯が破れた時にその調達をしたりするなど、なにかと頼りになる便利な役どころであった。

このように、大阪の葬祭業者のなかには、葬儀以外の場でも棒頭とか宰領として活躍するものもあり、それは葬儀の僧列に近世以来の格式を高める装置としての奴行列を担うことができた人たちでもあった。

おわりに

奴振りが付随する葬式は、もう見ることはできないのだろうか。昭和十二年（一九三七）に小島勝治が見たという布施の事例は、被葬者が葬儀請負業者の母堂であったという特別な事情もあって、霊柩車を使わない昔ながらの葬列が組まれるとともに、特別に「町振り」である奴振りが実施された。

確かに、霊柩車が登場する事で葬列は必要ではなくなった。しかし、霊柩車によって、葬列は組まれなくなったのだろうか。これについて、天王寺葬祭の村上武夫は次のように語っている。

東京の人から見れば、関西の葬式がお祭りのように派手に見えたのでしょね。私自身、二十五年くらい前（昭和32年頃）ですが、下寺町（大阪市天王寺区下寺町）で葬式が行われたとき、纏を持っていのを見たことがありました。故人はいわゆる任侠の人と云われた人でしたが、奴の行列というか、昔風の行列をつくっていました。棺桶を運ぶのは霊柩車でしたが、その前で鳩や小鳥を飛ばしました。⁽⁷⁹⁾霊柩車を使うため、おそらく葬儀会場から霊柩車までのごく短い距離だけ葬列が仕立てられたのであろう。村上が「奴の行列」というか、昔風の行列」と表現したように、纏を振っている奴振りは、通常ありえない。

いったん廃れてしまった奴振りのある葬列を仕立てるにあたって、記憶やイメージを頼りにこのような纏の奴振りが出現したのであれば、それがまた民俗といえるであろう。

ともあれ、霊柩車の時代になっても、葬列は仕立てられることはあった。平久では、近年でも葬儀の僧侶の先触れとして奴振りを出したことがあるという。もちろん、距離としては霊柩車までのごく短いものであるが、葬列のなかの「僧列」の一部に奴振りがあるという認識は今も引き継がれており、要望があれば復活も可能であることがわかる。

葬式における奴振りは、僧侶の格式を高めるためのものであり、葬列のなかでも特に僧列の一部である。その点において、寺院法要であつても葬式であつても、奴振りの役割は変わらない。葬式において、葬列の重要性が低くなるとともに、それを構成する僧列も同様に影響をうけた。しかし、奴振りが霊柩車にとって代わられたと考えるのは短絡的である。

そして、大阪の葬式における奴行列が近代の大阪の人々が求め、生み出した所産であるとする言説も、考え直さなくてはならない。ただ、さまざまな形で変化が進む近代化の時代のなかで、大阪の人々が非常に近世的な賑やかさである奴振りを受容したことは、たいへん興味深い。また、町振りという表現に見られるように、少なくとも大阪の人々が生み出した発明である、といった意識や自負があつたことも確かである。しかし、葬式に奴振りが伴うことそのものは、奇異なものでも突飛なことでもなかった。むしろ、それをものめずらしく取り扱った大阪の葬儀業者のしたたかさや、そううけとめた民衆がすでに近世的な文化の共通認識を忘却してしまつていたことに注目すべきである。

では、穢れ多き死の場と、神事の場との間を自在に行き来する身体については、どのように解釈すべきであろうか。これまで歴史的な経緯を明らかにしてきたように、穢れや清浄といった視覚から身体をとらえることは望ましくない。むしろ、その身体が存在の理由はそういった問題

から超越した存在であつて、格式を高める装置としての身体が近世から現代に至るまで連綿と伝承されてきたと理解すべきである。

註

- (1) 『まごころの軌跡—公益社創業70周年記念誌—』（公益社、二〇〇二）二六頁より。公益社は、大阪に本社を置き、首都圏にも拠点を広げる葬祭業者である。
- (2) 小島勝治「商都大阪の葬式—特に僧の行列に就いて—」（郷土研究 上方）九六号 一九三八
- (3) 井上章一「霊柩車の誕生」（朝日新聞社 一九八四）
- (4) 井上章一「霊柩車の誕生」一〇一頁
- (5) 拙稿「奴振りの芸態」（『民族藝術』Vol.17 二〇〇〇）および拙編著『岩滝の大祭礼—岩滝町大名行列の歴史と現況—』（京都府岩滝町、二〇〇二）
- (6) 鈴木勇太郎「回顧録」（私家版、一九三六）。なお、『回顧録』については、高橋繁行氏よりご教示いただいた。
- (7) 長谷川幸延「冠婚葬祭」（『大衆文芸』六月号、一九四一）一三二頁
- (8) 長谷川幸延「冠婚葬祭」一三三〜一三四頁
- (9) 「大阪と根性どえらい奴」は、鈴木則文の第一回監督作品で、藤田まこと主演。二〇〇七年九月にDVD化された。脚本を担当した中島貞夫氏に、奴振りについてお尋ねしたところ、イメージ作りのため公益社の重役に来てもらつて聞き取りをしたというが、名前までは覚えていないということだった。当時は、脚本作りに一ヶ月、撮影準備に一ヶ月、撮影に一ヶ月というハードスケジュールのため、仕事の詳細について記憶に残っていることは少ないが、この映画は比較的印象深かつたという。
- (10) 小島勝治「商都大阪の葬式—特に僧の行列に就いて—」七六二頁
- (11) 井上章一「霊柩車の誕生」一三二頁
- (12) 小島勝治「商都大阪の葬式—特に僧の行列に就いて—」七六三頁
- (13) この号には、岩井藍水「冠婚葬祭の略述（二）」、鷲尾正久「西宮地方の葬祭習俗」、宮本常二「西能勢地方の葬制」、西谷勝也「北淡路の葬制習俗」、岡市正人「河内枚方附近と攝津茨木附近の葬式」、栗山一夫「東播磨地方の送葬習俗」、岸田定雄「帯持考（北大和）」、中西祥男「滋賀県伊香立村の葬礼習俗」が掲載されていた。
- (14) 遠藤章弘編「葬祭五十年—株式会社公益社のあゆみ—」（公益社、一九八二）
- (15) 高橋繁行「葬祭の日本史」（講談社新書、二〇〇四）
- (16) 高橋繁行「葬祭の日本史」（二五頁）。その一方で同書には「奴葬列」（二六頁）という表現がみられ、また導師すなわち僧侶の乗物（駕籠のこと）の後ろに導師

のための持ち物の行列が続くことを指摘しており、そこには奴行列が含まれていない(三七頁)。奴行列は、主人の前に位置することが多いが、同書ではそれは僧列ではなく、葬列として理解していることから、小島のいう「僧列」の理解と異なっている。

- (17) 和田謙寿『葬送行列の意味するもの』(駒澤大學佛教學部論集)第一六號、一九八五)では、北海道から沖縄までの葬列八〇数例と韓国、中国の葬列を比較検討している。

- (18) 拙稿「奴振りの芸態」(『民族藝術』Vol.一七 二〇〇〇)一六二頁

- (19) 拙稿「奴振りの芸態」一六一頁、および拙編著『岩滝の大祭礼―岩滝町大名行列の歴史と現況―』四一―一七頁。

- (20) 林薫「二「御三家」の格式とその成立」(『史学雑誌』六九篇十二号、一九六〇)

- (21) 東京国立博物館所蔵、六曲一双、重要文化財。

- (22) 狩野博幸ほか『時代屏風聚花 続篇』(しこうしゃ図書販売、一九九三)所収、六曲一双。

- (23) ケンベル著、斎藤信訳『江戸参府旅行日記』(平凡社東洋文庫、一九七七)

- (24) 板谷徹「弥之助踊考―奴踊と小坊主と」(『藝能史研究』五六号、一九七七)

- (25) このことは、二〇〇六年一月十三日、藝能史研究会例会にて「飽きられた大名行列―津八幡祭礼の大名行列の真似―」と題して口頭発表をおこなった。報告要旨は『藝能史研究』一七三号(二〇〇六)に掲載している。なお、津八幡宮祭礼絵巻(ニューヨーク本)は、二〇〇四年秋に三重県立美術館で展示され、その全貌については『まつり・祭・津まつり―ニューヨークから里帰り―津八幡宮祭礼絵巻』(二〇〇四)に掲載されている。

- (26) 拙稿「春照の奴振り」(伊吹町教育委員会編『滋賀県選挙無形民俗文化財調査報告 春照八幡神社の太鼓踊り 附奴振り』春照太鼓踊り保存会、二〇〇四)に、全国二三ヶ所の奴振り一覧を掲載した。それを見ると、地域によって偏在していることがよくわかる。また、自ら北海道で奴振りを担った工藤勝美氏は、東京で日本奴行列研究会を発足させ、理事長として情報収集と普及啓発に努めてこられたが、氏によれば奴振りは全国に三〇〇ヶ所以上あるという。

- (27) 諏訪大社の御柱祭にみられる「お騎馬行列」は、凱旋騎馬、家老騎馬、殿様騎馬の四組があり、長柄傘や草履取りの所作が見事である。塩尻市の小野神社の御柱祭と高遠の貴船神社の春祭りでも「騎馬行列」が、武石村の子檀嶺神社の御柱祭と上田市の生島足島神社の御柱祭では「大名ねり」が、飯田のお練りまつりでは「大名行列」がでる。御柱祭の影響と、名称の關係が興味深い。

- (28) 金沢の市街地より北西方向の郊外で、秋祭りに奴振りが多く見られる。それら

のなかでも、赤つつらの化粧が印象的な粟崎の奴と、五郎島の子供奴が、百万石まつりに出演する。『内灘町史』(内灘町、一九八二)には、内灘町のいくつかの神社で奉納される奴振りが、明治になって粟崎を基点に伝播し、広まった過程が記されている。また、能登半島には珠洲市および門前町に奴振りがみられる。

- (29) 島田の帯祭には、刀の柄に絢爛豪華な帯をかけ、傘を広げて歩く「大奴」が登場する一方で、毛槍、立傘、台笠の奴もでる。島田市の近くでは大井川町、掛川市で奴振りが見られる。また、吉田町には「出奴」「入奴」があり、南伊豆町にも「槍振り」がある。箱根の「大名行列」は、昭和二〇年(一九三三)の温泉博覧会で小田原藩の行列を模した始まった。富士山の北側、山梨県にも都留市、上九一色村で奴振りがある。

- (30) 西尾市、刈谷市、知立市で奴振りがある。また、知多半島の南端、南知多町師崎とその先に浮かぶ篠島にも「大名行列」がある。

- (31) 湖東では米原市に「公家奴」「武家奴」「蹴り奴」があるほか筑摩神社の鍋冠祭にも挟箱だけの奴振りがあり、伊吹山麓の春照八幡神社にも奴振りがある。また、多賀町の多賀大社では四月二十二日の古例大祭に奴振りがある。湖西では高島市の七川祭では「的練り奴」「樽振り奴」が卑猥かつ風刺のきいた口上で練り歩く。甲賀地域では甲賀市の油日祭では五年ごとに奴振りがでる。「花奴」のほかに「長持ち奴」がでることが特徴。また、油日から山をひとつ越えた三重県伊賀市では、上野天神祭に奴振りがでる。このほか、湖北の西浅井町集福寺にも奴振りがみられる。『滋賀県の民俗芸能―滋賀県民俗芸能緊急調査報告書―』(滋賀県教育委員会、一九九八)、拙稿「春照の奴振り」、拙稿「油日の奴振りの特徴」(平成十八年度油日神社奴振映像記録保存事業 滋賀県選挙無形民俗文化財 油日神社の奴振)DVDの解説書、甲賀市教育委員会、二〇〇七)を参照のこと。

- (32) 大江町に「練り込み」と称する奴振りが数ヶ所あり、これが舞鶴市大森神社の大名行列に伝播した。また、与謝野町岩滝でも大名行列がつたわる。『京都府の民俗芸能―京都府民俗芸能緊急調査報告書―』(京都府教育委員会、二〇〇〇)、拙編著『岩滝の大祭礼―岩滝町大名行列の歴史と現況―』を参照されたい。

- (33) 「奴」「道中奴」「投げ奴」「練り奴」「奴振り」「奴行列」「大名行列」などの名称でみられる。『香川県の民俗芸能―香川県民俗芸能緊急調査報告書―』(瀬戸内海歴史民俗資料館、一九九八)、『愛媛県の民俗芸能―愛媛県民俗芸能緊急調査報告書―』(愛媛県教育委員会、一九九九)、『徳島県の民俗芸能―徳島県民俗芸能緊急調査報告書―』(徳島県教育委員会、一九九八)を参照されたい。

- (34) 佐賀県の奴振りは、「行列浮立」と呼ばれ、金子信二「行列浮立考」(『佐賀民俗学』一七号、一九九八)によって悉皆的に調査報告がなされている。また、熊本県八代市の妙見祭では挟箱の奴行列がでる。「花奴」と呼ばれるこの奴振りは、

- 高子原村に伝承されていたとされ、養田田鶴男「八代高子原村花奴組の成熟（前篇）（後篇）」（『熊本史学』一七号、一九五九、一八号、一九六〇）に詳しいほか、八代市立博物館未来の森ミュージアム編・発行『妙見祭民俗調査報告書』（一九九六）に詳しい。また、八代海を挟んだ対岸の天草諸島には、「鳥毛行列」などと呼ばれる、主に檜振りの奴振りがあつた。八代の花奴は、門外不出、とくに天草には教えないと伝えられていることもおもしろい。九州では、大分県にも数箇所、奴振りが確認される。
- (35) 拙稿「豊満神社の祭祀行列」（『近江愛知川町の歴史』第四巻 ビジュアル資料編・分冊三、滋賀県愛知町、二〇〇七、一一二～一一七頁）に、写真掲載されている。
- (36) 『続東円堂誌』（東円堂公民館、二〇〇一）一三四～一三五頁
- (37) 『続東円堂誌』一三四～一三五頁。なお信光寺では現在、これらの古文書の閲覧が可能な状態にはなっておらず、原本の確認はできなかった。
- (38) 以下、等覚寺文書より引用。
- (39) 今本『地図資料からみた愛知川』（『近江愛知川町の歴史』第四巻 ビジュアル資料編・分冊三、滋賀県愛知町、二〇〇七）一五二～一五四頁に、写真掲載されている。
- (40) 文久元年（一八六二）一〇月一〇日の葬儀は、和宮様の入御のため身葬のみおこない、翌十一日夜に剃刀、十二日夜に密葬、本葬は宮様御通行後にとりおこなった。
- (41) 拙稿「長沢の奴振り」（『滋賀県の民俗芸能—滋賀県民俗芸能緊急調査報告書—』二二七～二二九頁）
- (42) 拙稿「能登背の奴振り」（『滋賀県の民俗芸能—滋賀県民俗芸能緊急調査報告書—』二四二～二四三頁）
- (43) 篠崎昌美「浪華夜ばなし—大阪文化の足あと—」（朝日新聞社、一九五四）二四頁
- (44) 大阪毎日新聞 明治四十四年十一月十九日付
- (45) 大阪毎日新聞が川上の葬儀に関して、僧列の個所以外に大きな文字で強調したのは、次の通り。「貞奴は長い瞼毛に露のやうな涙を宿して」（弟子たちは）青白い顔をして淋さうに彷徨。「お花（献花の花車）が二百三十五（台）よ」「貞奴を見のがすまい」「群衆の凄じかつたのは一心寺前」「お伽倶楽部の三人の學生が龕前に立つて弔文を読み上げる」「二名の看護婦に擁せられた貞奴」（貞奴が）顔色サツと蒼白く變じて其場に卒倒」
- (46) 高橋繁行によると、その距離は約二・六キロメートルであり、それだけの長さの葬列であつたことがわかる。（『葬祭の日本史』一七頁）
- (47) 比経啓助「明治時代の葬列とその社会的象徴性」（『日本大学芸術学部紀要』二〇〇四）
- (48) 高橋繁行「葬祭の日本史」（三七頁）によれば、大阪では、明治一八年（一八八五）に五代友厚の葬儀がおこなわれており、自宅から斎場までの一〇キロメートルに及ぶ葬列があつたというが、奴が加わつたかどうかは判然としないという。また、此経啓助「明治人の葬式」（現代書館、二〇〇二）では、川上首二郎を含め二六名の葬式について当時の新聞記事を紹介しているが、奴振行列についての記録は収録されていない。
- (49) 近世の大坂における葬具貸物業者等については木下光生「近世大坂における墓所聖と葬送・諸死体処理」（細川涼一編『三昧聖の研究』碩文社、二〇〇一）が、明治期の東京における葬儀請負業の発生については、村上興匡「近代葬祭業の成立と葬儀慣習の変遷」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第九一集、二〇〇一）が詳しい。
- (50) 小島勝治「商都大阪の葬式—特に僧の行列に就いて—」
- (51) 鈴木勇太郎「回顧録」一～五頁
- (52) 木下光生は「近世大坂における墓所聖と葬送・諸死体処理」において、一八世紀初頭には葬礼道具を扱う同業者組織として乗物屋中が形成されており、一八世紀後半以降の貸色屋・乗物屋につながるとしている。また、彼らは墓所聖への謝礼を立て替える存在であると同時に、墓所へ送り捨てとなった葬礼道具の取り扱いをめぐって対立することもあつたとする。
- (53) 鈴木勇太郎「回顧録」四～六頁
- (54) 鈴木勇太郎「回顧録」五一頁
- (55) 村上興匡「近代葬祭業の成立と葬儀慣習の変遷」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第九一集、二〇〇一）
- (56) 津田慶一氏への聞き取り調査による。
- (57) 津田慶一氏によれば、島之内で唯一、大丸心斎橋店の横の清水湯から南へ流れる水脈が確認されている。今でも清水湯の水風呂は地下水を使っているという。
- (58) 北川央によると、一般に大阪の水は塩気を含んでいるらしく、すでに近世から水屋が存在していたらしい。北川央「おさか図像学—近世の庶民生活—②水の都・大坂」（産経新聞 二〇〇三年八月八日付、のち北川央編著「おさか図像学—近世の庶民生活—」東方出版、二〇〇五年に再録）
- (59) 津田慶一氏への聞き取り調査による。また、梅八の小畑修は、明治時代の棒頭について「寺人足を世話する店のこと」と述べている（『座談会—長老諸氏に聞く 奴の行列から霊柩車の時代へ—』『戦前の浪華の葬祭—奴の行列から霊柩車の時代へ—』大阪市規格葬儀指定店事業協同組合・大阪市規格葬儀取扱指定

- 店組合、一九八二、三四頁。小畑が梅八であることは、出席者紹介（同書四頁）に記されている。この梅八は、鈴木勇太郎『回顧録』に掲載されている大阪葬儀同盟組合の役員一覧（一九三三）に見える「梅八／小畑清治郎」の縁者であろう。
- (60) 津田慶一氏への聞き取り調査による。ただし、梅八の小畑修は、天神さんは籠友、御霊神社は水久、難波神社は阿波弥、生国魂神社は白木屋、南で三ヶ寺を得意先に持っていたに大久とあり、若干の相違がみられる（「座談会―長老諸氏に聞く 奴の行列から霊柩車の時代へ」三五頁）。
- (61) 津田慶一氏への聞き取り調査による。
- (62) 小島勝治「商都大阪の葬式―特に僧の行列に就いて―」
- (63) 南木生「五十年前の千日前」（郷土研究 上方）千日前今昔號、一九三二
- (64) 高橋好劇手記・上田長太郎輔綴「千日前覚え帳」（郷土研究 上方）千日前今昔號、一九三二
- (65) 津田慶一氏所蔵フィルム。撮影年月日は記録されていないが、フィルムの後半にご息がご幼少の様子が撮影されており、それを根拠に撮影年が明らかになった。
- (66) 津田慶一氏への聞き取り調査による。特に、卸業者が建ち並ぶ久宝寺町では、ほぼ一軒ずつご祝儀をもらったという。また、8ミリフィルムの映像で橋の上を通るときには所作がなかったことについて、風があることと、ご祝儀がもらえないことの二点が考えられるという。
- (67) 津田慶一氏所蔵の行列次第書「三十八年度 熊野大神宮渡御」より。ところどころ朱書きがあり、奴振りの部分については「」でくくられていた。津田喜三郎氏が使用した書類である。
- (68) 津田慶一氏への聞き取り調査による。
- (69) 「座談会―長老諸氏に聞く 奴の行列から霊柩車の時代へ」三〇―三四頁。寺井尚孝は奴の経験者らしく、座談会で長柄持の実演を披露している。寺井が花重であることは、出席者紹介（同書四頁）に記されている。この花重は、鈴木勇太郎『回顧録』に掲載されている大阪葬儀同盟組合の役員一覧（一九三三）、「葬祭五十年」に掲載されている大阪市規格葬儀取扱店名簿（一九四九）に見える「花重／寺井重孝」の縁者であろうことは容易に推察される。
- (70) 津田慶一氏所蔵の行列次第書「三十八年度 天満宮渡御」より。これも、「三十八年度 熊野大神宮渡御」と同じく、津田喜三郎氏が使用した書類である。
- (71) 鈴木勇太郎『回顧録』、井上章一「霊柩車の誕生」。井上は、実際には東京のほうで早く霊柩車が走っていたが、鈴木勇太郎は他府県に先んじて霊柩車を取り入れたという自負をもっていた、としている。
- (72) 当初二ヶ月ほどは、東区内淡路町二丁目にあった。
- (73) 遠藤章弘編『葬祭五十年―株式会社公益社のあゆみ―』二六―三七頁
- (74) 遠藤章弘編『葬祭五十年―株式会社公益社のあゆみ―』一一七頁
- (75) 津田慶一氏への聞き取り調査による。
- (76) 遠藤章弘編『葬祭五十年―株式会社公益社のあゆみ―』二〇七―二二頁
- (77) 大阪供奴保存会の会員は、現在九名である。
- (78) 津田慶一氏への聞き取り調査による。
- (79) 「座談会―長老諸氏に聞く 奴の行列から霊柩車の時代へ」三〇頁
- 〔付記〕 本稿は、国立歴史民俗博物館の共同研究「宗教者の身体と社会」（二〇〇五年一月二四日）において中間報告をおこない、出席者より貴重なご助言をいただいた。そのほか、日本民俗学会第五五回年会（二〇〇三年一〇月五日）においても一部を口頭発表し山田慎也氏よりご助言を戴いた。また、鈴木勇太郎の『回顧録』は、高橋繁行氏よりご提供いただき、ご助言をいただいた。あわせて、度重なる聞き取り調査に応じてくれた大阪供奴保存会の代表にして平久の津田慶一氏、貴重な史料を紹介させていただくことに了解いただいた等覚寺の藤宮鑑・修子御夫妻には、ここで謝意を表したい。
- （愛知川町教育委員会町史編纂室、国立歴史民俗博物館共同研究員）
（二〇〇七年九月十四日受理、二〇〇八年二月二十八日審査終了）

大阪の葬祭業者一覧

No.	分類	屋号(のち改名)	所在地	明治16年 (1883)	明治24年 (1891)	明治31年 (1898)	大正3年 (1914)	大正11年 (1922)	昭和3年 (1928)	昭和8年 (1933)	昭和24年 (1949)	昭和37年 (1962)
1		駕友	天満(北区末広町)	駕人足業・ 葬具貨物業	鈴木勇太郎	鈴木勇太郎	鈴木勇太郎	鈴木勇太郎	鈴木勇太郎	鈴木勇太郎	鈴木而良	
2		駕市	赤浦	駕人足業・ 葬具貨物業	富永市蔵	永富市蔵	富永宇一			見附孫次郎		
3		駕市支	北区							見附ツル		
4		駕文	三軒屋(北区松ヶ枝町)				川崎文治郎		伊東辰之助			
5		駕平	富島(西区本田町)				志賀平右衛門	志賀平右衛門	志賀清吉		志賀清吉	
6		駕春	高津(南区島之内)				原春太郎					
7		駕辰	天王寺				松本辰之助	松本辰之助				
8		駕米						今井米次郎				
9		駕権						大原徳造		大原吾一		
10		駕音						柏野音吉				
11		駕源	西区					山内治儀郎	山内治儀郎			
12		駕嘉/大嘉	南区南桃谷町					柳本幸吉	柳本幸吉		柳本利一	柳本利一
13		駕三						増田儀三郎	増田儀三郎		増田儀三郎	
14		駕豊/木田號						福井豊造	福井豊蔵			
15		駕豊	東成区						丸谷豊	丸谷豊		
16		駕熊						福井直三郎				
17		駕仙						安藤仙治郎		石山清吉		
18		駕岩						北風安太郎				
19		駕浅						嶋澄又吉				
20		駕浅							藤澤弥三郎	藤澤弥三郎		
21		駕浅	生野区猪飼野西3丁目						大東浅次郎		大東富男	
22		駕清						森本喜助		森本梅太郎		
23		駕鹿							西谷鹿蔵			
24		駕定							桑名定吉	桑名定吉		
25		駕駒							谷野駒吉			
26		駕喜							加藤五郎			
27		駕利							太田儀之助			
28		駕竹							宮本保治郎			
29		駕竹							阪東季一郎			
30		駕慶							植野弥太郎			
31		駕長							西本長松			
32		駕甚							安田吉蔵			
33		駕富							奥野庄三郎			
34	駕	駕新	南区						木下新三郎			
35		駕徳	西成区						佐原徳治郎			
36		駕房/東淀川葬祭十三管 業所	東淀川区十三東之町3丁目						保住房太郎	保住房太郎	保住房太郎	
37		駕仙	港区						山里仙太郎			
38		駕留								大久保留吉		
39		駕政/東淀川葬祭淡路管 業所	東淀川区国次町							辻田政太郎	辻田政太郎	
40		駕常								松阪恒吉		
41		駕六	北区							六車喜太郎		
42		駕寅	北区							川崎市松		
43		駕常	北区							米谷常太郎		
44		駕勝	北区							吉川勝太郎		
45		駕勘	北区							田淵熊太郎		
46		駕重	北区							山口菊次郎		
47		駕徳	北区							福本徳次郎		
48		駕嘉	北区							甲島嘉一		
49		駕安	北区							越野安吉		
50		駕春	北区							越野俊		
51		駕熊	北区							木村長三郎		
52		駕幸	北区							水島幸太郎		
53		駕廣	北区							廣尾廣吉		
54		駕安	北区							田中安治郎		
55		駕利	東淀川区							石川良太郎		
56		駕徳支	東淀川区							徳永藤蔵		
57		駕熊	東淀川区							尾西光之助		
58		駕房支	東淀川区							保住スガ		
59		駕庄	東淀川区							田中庄吉	田中庄吉	
60		駕政支	東淀川区							辻田平七		
61		駕音	東淀川区							上田音吉		
62		駕喜	東淀川区							弓崎徳松		
63		駕庄支	東淀川区							藤田甚太郎		
64		駕定	旭区							池田定吉		
65		駕徳	旭区							徳永辰次郎		
66		駕徳支	旭区							橋詰儀三郎		
67		駕留支	旭区							大久保留吉		

No.	分類	屋号(のち改名)	所在地	明治16年 (1883)	明治24年 (1891)	明治31年 (1898)	大正3年 (1914)	大正11年 (1922)	昭和3年 (1928)	昭和8年 (1933)	昭和24年 (1949)	昭和37年 (1962)
68		駕作	旭区							中元興作		
69		駕孝	旭区							桑名孝太郎	桑名孝太郎	
70		駕惣／駕吉葬儀社	旭区(城東区白山町3丁目)							赤沢惣七		白山正直
71		駕増	都島区野江西ノ町3丁目								増永高	
72		駕北	都島区都島本通3丁目								北田清	
73		駕長	福島区海老江下2丁目								橋本こま	
74		駕政	福島区今開町1丁目								上野精一	
75		駕三／天葬	天王寺区大道1丁目								村上友太郎	村上友太郎
76		駕春	天王寺区勝山通1丁目								山本寿三郎	
77		駕貞	天王寺区									沢田庄次郎
78		水駒／駕駒	南区東平野町1丁目								水野駒三郎	水野駒三郎
79		駕重	南区東堀町								瀬戸川大治郎	瀬戸川大治郎
80		駕重	西淀川区佃町								石原一雄	
81		駕庄	東淀川区塚本町5丁目								田中庄吉	
82		駕友	東成区片江町3丁目								貝本実	貝本実
83		駕菊	東成区大今里町本町2丁目								奥江タカ	
84		駕音／今里駕音大■営業所	東成区大今里北ノ町3丁目								山口末広	山口末広
85	駕	株式会社駕音葬儀社	東成区									山口■太
86		駕勘	東成区深江中5丁目								浅川春吉	浅川春吉
87		駕三	東成区片江町3丁目								沢野キシ	北村房■
88		駕松	東成区北中本町2丁目								平尾松治郎	
89		駕音／駕本葬祭	生野区大瀬町2丁目								貝本己弥男	貝本己弥男
90		駕竹	生野区猪飼野中1丁目								上辻サト	
91		敬弔社本社／駕清号	生野区南生野町3丁目								久世栄太郎	久世栄太郎
92		駕伊／山本葬儀社	生野区新今里町6丁目								山本伊之吉	山本伊之吉
93		駕由	生野区猪飼野中6丁目								松枝秀一	松枝秀一
94		駕昭	生野区猪飼野東10丁目								浅川マスエ	
95		駕秀	生野区大友町2丁目								宮崎ヨシエ	宮崎辰雄
96		駕市	生野区南生野町1丁目									山田市松
97		駕栄	旭区赤川町4丁目								坊谷栄次郎	
98		駕吉	城東区南中浜町3丁目								花岡義一	
99		駕シヨ	阿倍野区共立通2丁目								松下アサエ	
100		駕善	住吉区粉浜西之町3丁目								村井善次郎	
101		駕源	東住吉区田辺東之町								磯野源太郎	磯野源太郎
102		駕鶴	東住吉区田辺西之町4丁目								安田保太郎	
103		駕徳	東住吉区湯里町								山本主計	
104	興	興萬	玉造(東区・天王寺区)	大阪葬具 (株)傘下	鈴木伊兵衛	鈴木伊兵衛	鈴木伊兵衛					
105		乗虎	骨屋町	葬具貨物業								
106	乗	乗音	内久宝寺町(東区→中央区)	葬具貨物業			木谷音吉					
107		乗仁	六万休町(天王寺区)		吉川仁平		吉川徳治郎	吉川徳治郎				
108		花直	此花町(北区東天満)				橋本長三郎	橋本長三郎				
109		花直						橋本竹三郎				
110		花豊	梅本町(西区川口・本田)				福田松之助	福田松之助	福田松之助			
111		花卯	日本四(浪速区日本橋筋)				竹中末吉	竹中末吉				
112		花松						松田松吉			松田太一	
113		花米							真継米太郎			
114		花末							北野末次郎	北野末治郎		
115		花千代							小高千代松			
116		花喜							高島喜三郎			
117		花市							田中秀松			
118		花亀							大善亀吉			
119		花友	都島区東野田町3丁目							中井源治郎	中井源治郎	
120		花石								古川石太郎		
121		花亀	北区							羽田亀吉		
122	花	花直	北区							橋本安治郎		
123		花富	北区							橋本富市		
124		花伝	北区							新田竹蔵		
125		花吉	北区							吉川末治郎		
126		花田	北区							田中恵深		
127		花源	北区							黒澤源治郎		
128		花卯	北区							藤山卯之助		
129		花保	北区							小西保逸		
130		花徳	北区							阪口徳治郎		
131		花重	北区天神橋筋2丁目							寺井重孝	寺井重孝	
132		花幸	北区							廣田幸次郎		
133		花甚	北区							森井甚一郎		
134		花菊	東淀川区							西方イト		
135		花寅	東淀川区							野口寅吉		
136		花福	東淀川区							福田治三郎		
137		花藤	東淀川区							北口藤次郎		

No.	分類	屋号(のち改名)	所在地	明治16年 (1883)	明治24年 (1891)	明治31年 (1898)	大正3年 (1914)	大正11年 (1922)	昭和3年 (1928)	昭和8年 (1933)	昭和24年 (1949)	昭和37年 (1962)
138		花友文	旭区							石橋駒次郎		
139		花福／花福葬儀社	旭区(城東区鳴野町)							川端三蔵	川端福太郎	
140		花源	旭区							吉岡源次郎		
141		花源支	旭区							吉岡ヨシ		
142		花清	旭区							能生清一		
143		花寅	旭区							古林寅太郎		
144	花	花佐	城東区関目3丁目									辻本佐太郎
145		花甚	西区本田町								田中甚九郎	
146		花丹	港区市岡元町								丹後藤太郎	
147		花岩	大正区北泉尾町								赤尾岩次郎	
148		花吉	浪速区芦原町								川本熊太郎	
149		花浅	西淀川区野里町								大森武敏	
150	水	花卯／駕卯	旭区(阿倍野区北田辺町)							中川卯之助	中川卯之助	
151		水卯	松島				出野亀蔵	出野亀蔵				
152		水熊	玉造(東区・天王寺区)				真弓米吉	真弓米吉	真弓米吉			
153		共栄組／水勝						今井竹松	今井竹松			
154		水作	東区内久宝寺町2丁目(中央区)					玉木作治郎	玉木作治郎		玉木武男	玉木武男
155		水留						岸田留吉				
156		水友						樋口政吉	樋口政吉			
157	水	水久							石川久三郎			
158		東水寅							山田音吉			
159		水菊／水菊号	南区内安堂寺通2丁目(中央区)								河尻元次郎	川尻元次郎
160		中道元町水熊／水熊	東成区中道元町2丁目(中央区)								住田精治	住田精治
161		東水熊葬祭／東水熊	東成区西今里町4丁目(中央区)								住田隆治	住田隆治
162	店	八百清	靱(東区→中央区本郷町)	葬具貨物業				松岡清一				
163		八百清	阿波座(西区)				松岡清兵衛					
164		八百松						長尾松之助				
165		大為	長柄(北区天満1丁目)	駕人足業・ 葬具貨物業	藤井元治郎	藤井元治郎	藤井元治郎					
166		天満屋	江戸堀(西区)	駕人足業・ 葬具貨物業					八木弁之助			
167		住吉屋	千代崎橋(西区)	葬具貨物業								
168		山田谷	本田(西区)	葬具貨物業			南喜三郎	南利一				
169		初代 丸常	北新地	葬具貨物業				池田文吉	池田文吉	池田幸吉		
170		大仁屋	船場	大阪葬具 (株)傘下	石垣文之助	石垣文之助		山本林平	山本林平			
171		丸長	岩崎	大阪葬具 (株)傘下	杉本忠次郎		杉本鉄一	杉本鉄一				
172		丸長	南地	大阪葬具 (株)傘下								
173		伊勢武	池田町	大阪葬具 (株)傘下								
174		大彦	瓦町	大阪葬具 (株)傘下								
175		河太	順慶町	大阪葬具 (株)傘下								
176		天吉	竜田町	大阪葬具 (株)傘下								
177		大仁屋	梅田	大阪葬具 (株)傘下								
178	その他	山栄	木幡町	大阪葬具 (株)傘下								
179		丸天	江戸堀		天野喜七	天野喜七						
180		田中屋	阿倍野		田中徳治郎	田中徳治郎	田中徳治郎	田中徳治郎	田中徳治郎			
181		本田	難波		矢部勝平	矢部勝平	矢部勝平					
182		池春	京町堀					池田春蔵	池田卯之助			
183		明井／明石屋	北区				児島弁治郎	児島竹松	児島竹松	児島竹松		
184		玉房	赤手拭				玉澤房吉					
185		大為	相生町				藤井常吉	藤井常吉	藤井常吉	藤井常吉		
186		白伝						大橋音吉				
187		白木屋						大橋亀太郎	大橋亀太郎			
188		西丸長／丸長						岡市太郎	岡市太郎			
189		熊田／熊田屋						熊田圓治	熊田圓治			
190		備久						湖東松太郎	湖東松太郎			
191		近弥						櫻井亀吉				
192		山亀						鈴木三之助	鈴木三之助			
193		駕菊						鈴木種次郎				
194		中村						中村亀太郎				
195		春山						春山喜市				
196		大為／大為本店／本大為	大淀区長柄中通2丁目					藤井覚三	藤井覚三	藤井覚三	藤井覚三	
197		山七						藤井七太郎	藤井七太郎			

No.	分類	屋号(のち改名)	所在地	明治16年 (1883)	明治24年 (1891)	明治31年 (1898)	大正3年 (1914)	大正11年 (1922)	昭和3年 (1928)	昭和8年 (1933)	昭和24年 (1949)	昭和37年 (1962)
198		大為						藤井長太郎				
199		三木						三木森太郎				
200		熊勘						矢野律三	矢野律三			
201		山源						山脇寅吉				
202		美濃勘							浅野弥一郎			
203		石松	天王寺区						石川松之助			
204		丸吉							井上四郎			
205		北友／大淀葬祭社浪速営業所	北区浪花町						金谷精二	金谷精二	金谷辰蔵	
206		吉野川	浪速区						川岸清三郎			
207		丸三							河村熊太郎			
208		松源／大淀葬祭社中津営業所	大淀区中津本通2丁目						木村福太郎		金谷辰蔵	
209		大辰							庄辰治			
210		銀南屋							杉原市松			
211		加賀重／加賀屋	西淀川区(福島区鷺州本通1丁目)						達磨治三郎		達磨治三郎	
212		阿波弥	東区(西区立売堀南通1丁目)						辻本丑松		熊田朔太郎	熊田明太郎
213		矢號							濱口米吉			
214		平久	南区島之内(浪速区元町)						平野喜三郎			津喜三郎
215		古伊							古川長四郎			
216		丸吉	此花区						森喜三郎			
217		森卯							森田卯之助			
218	その他	八木久／住吉葬祭							八木卯之助		八木卯之助	
219	その他	開路舎	住吉区						利見正太郎			
220	その他	大淀葬祭社本社	大淀区天神橋筋8丁目								金谷辰蔵	
221		本竹								木村竹松		
222		梅八								小畑清治郎		
223		木村								木村常治郎		
224		大森								大前緑十郎		
225		西川	北区							西川庄作		
226		丸七	北区							奥澤治郎		
227		金澤	北区							金澤立太郎		
228		天安	北区							吉川安吉		
229		播磨	北区							玉村大三郎		
230		白木支	北区							村川藤蔵		
231		白木屋	北区							山口竹松		
232		小西	北区							舟阪音次		
233		西村屋	東淀川区							西村寅之助		
234		大正屋	東淀川区							角野捨吉		
235		中村屋	東淀川区							中村市松		
236		丸浅	東淀川区							朝野マス		
237		山田屋	東淀川区							山田捨吉		
238		明石屋	東淀川区							赤井マサ		
239		壺井屋	旭区							壺井己之助		
240		連鎖園	旭区							中村たきの		
241		野田屋	旭区							野田寅吉		
242		中島	旭区							吉崎三之助		
243		丸谷支	旭区							丸谷藤吉		
244		明石屋	旭区(城東区野江西ノ町3丁目)							明石大吉	明石明	
245		湯谷／湯谷葬儀社	旭区(城東区今福南1丁目)							湯谷藤吉	湯谷藤吉	湯谷秀三郎
246		湯谷支／西岡葬儀社	旭区(城東区放出町)							湯谷九一郎	西岡欣治	西岡照代
247		通信葬祭部	城東区源訪東2丁目									松本文蔵
248		丸吉	福島区大野町2丁目									
249		中島屋	福島区大開町1丁目								太田修次	
250		丸吉	福島区江成町								中島太郎一	
251		福島葬祭	福島区上福島中2丁目								櫛山日出子	
252		川村仙太郎	此花区伝法町2丁目								菅生保二郎	
253		此花葬祭	此花区四貫島徳平町								川村仙太郎	
254		公益社本社	東区北浜3丁目								北井忠兵衛	
255		田村英雄	西区江戸堀北通5丁目								小西聖夫	
256		札三	港区八幡屋薄島町								田村英雄	
257		増地政太郎	大正区小林町									増地卯三郎
258		浅井千代次郎	天王寺区大道5丁目								浅井千代次郎	
259		金田家	天王寺区上之宮町									金田敏明
260		安本二郎	南区南桃谷町								安本二郎	
261		浪速葬祭	浪速区馬淵町								松井直治郎	松井直治郎
262		田中屋	西淀川区大和田町								井上トミエ	
263		大仁屋	西淀川区姫島町								中西松平	
264		阪神葬儀社	西淀川区御幣島西1丁目								久保里次	
265		泉原三郎	東淀川区豊里菅原町								泉原三郎	

No.	分類	屋号(のち改名)	所在地	明治16年 (1883)	明治24年 (1891)	明治31年 (1898)	大正3年 (1914)	大正11年 (1922)	昭和3年 (1928)	昭和8年 (1933)	昭和24年 (1949)	昭和37年 (1962)
266		十三葬祭	東淀川区十三東之町3丁目								加古亀造	
267		淡路葬祭社	東淀川区豊里菅原町								中村政一	
268		新興葬祭	東淀川区三国町								福田実	
269		飯島ゲン	東成区東今里町4丁目								飯島ゲン	
270		川上清三郎	東成区東小橋北ノ町								川上清三郎	
271		中村留吉	東成区西今里町1丁目								中村留吉	
272		交信社	生野区生野田島町2丁目								西田キヲ	西田きわ
273		堀川葬儀社／株式会社極楽社	生野区鶴橋北之町1丁目								堀川弥一郎	堀川弥市郎
274		敬申社林寺出張所	生野区林寺町3丁目								久世栄太郎	
275		敬申社南生野出張所	生野区南生野町2丁目								久世栄太郎	
276		敬申社舍利寺出張所	生野区舍利寺町3丁目								久世栄太郎	
277		やすな	生野区猪飼野東3丁目								古田邦三郎	古田忠義
278		金田屋／金田家葬儀社	生野区中川町4丁目								藤井音吉	藤井音吉
279		極楽社葬営業所	生野区箕西足代町									松野誠一
280		生野合同葬祭	生野区鶴橋南ノ町3丁目									川上広太郎
281		木下葬祭	生野区東桃谷1丁目									木下徳次郎
282		芝野葬儀社	生野区勝山通6丁目									芝野キクエ
283		妹尾葬儀社	生野区猪飼野西3丁目									妹尾静子
284		タル市	旭区大宮町8丁目								田中徳次郎	
285		葬敬社	旭区森小路7丁目								恒光長太郎	
286		野田吉夫	旭区今市町								野田吉夫	
287		公益社森小路営業所	旭区今市町								小西聖夫	
288		南公社	阿倍野区阿倍野筋3丁目								亀井茂八	
289		吉水初馬	阿倍野区昭和町中4丁目								吉水初馬	
290		工藤佐一	阿倍野区北島東1丁目								工藤佐一	
291		公益社南営業所	阿倍野区阿倍野筋3丁目								小西聖夫	
292	その他	共善社	阿倍野区共立通2丁目									上畑辰雄
293		今井己之助	住吉区墨ノ江東1丁目								今井己之助	
294		大久保清吉	住吉区粉浜仲之町1丁目								大久保清吉	
295		芋忠／芋忠総本店／帝塚山芋忠	住吉区帝塚山東4丁目								神並寅太郎	神並虎太郎
296		芋忠／芋忠本店	住吉区住吉町								神並卯之助	
297		敬申社住吉出張所	住吉区北加賀屋町								久世栄太郎	
298		公益社住吉営業所	住吉区長狭町								小西聖夫	
299		斎藤員男	住吉区安立町4丁目								斎藤員男	
300		阪堺葬祭	住吉区帝塚山中2丁目									仲信■
301		森安	住吉区西長居町中3丁目									陸卯之助
302		石戸民蔵	東住吉区平野元町								石戸民蔵	
303		羽山豊次郎	東住吉区北田辺町								羽山豊次郎	
304		春木為遠	東住吉区北田辺町								春木為遠	
305		田中テル	東住吉区鷹合町								田中テル	
306		村上葬祭	東住吉区桑津町								村上猶吉	村上猶吉
307		上見栄太郎	東住吉区杭全町								上見栄太郎	
308		壱村龍蔵	東住吉区平野元町2丁目								壱村龍蔵	
309		丸山寅吉	東住吉区田辺東之町4丁目								丸山寅吉	
310		古伊店／古伊葬祭	東住吉区平野元町								古川徳松	古川雄
311		堺栄	東住吉区平野京町									
312		藤江葬祭	東住吉区杭全町									藤江昭
313		美章園公益社	東住吉区桑津町1丁目									和田安松
314		湯谷葬祭	東住吉区平野梅ヶ枝町4丁目									湯谷平八郎
315		八木久	西成区玉出新町通								徳岡治良吉	
316		公益社西成営業所	西成区玉出新町通2丁目								小西聖夫	
317		博公社本社／博公社	西成区瀬路通2丁目								木村源七	木村源七
318		博公社鶴北出張所	西成区鶴見橋北通								木村源七	
319		博公社旭南出張所	西成区旭南通								木村源七	
320		博公社松通出張所	西成区松通								木村源七	
321		博公社柳通出張所	西成区柳通								木村源七	
322		博公社汐路出張所	西成区汐路通								木村源七	
323		博公社千本出張所	西成区千本通								木村源七	
324		博公社田端出張所	西成区田端通								木村源七	
325		博公社姫松出張所	西成区姫松通								木村源七	
326		博公社天下茶屋出張所	西成区南神合町								木村源七	
327		博公社三日路出張所	西成区三日路町								木村源七	
328		博公社曳船出張所	西成区曳船町								木村源七	
329		成光社	西成区									芝村正雄
330		大久	西成区松田町1丁目									近江秀吉
出典				鈴木勇太郎 「回顧録」より	「回顧録」より 大阪葬具 貨物業組 合・創立委員	「回顧録」より 水統合資 会社・構成員	「回顧録」より 大阪葬具 貨物業組 合・役員・組 合員(142名)	「回顧録」より 飾付市営 に対する異 議申し立て に集合した 同業者	「回顧録」より 大阪府 公認葬儀組 合・役員幹 部・組合員 (618名)	「回顧録」より 大阪葬儀 同盟組合・ 役員(102名)	「葬祭五十 年」より大 阪市規格葬 儀取扱店名 簿(131名)	「大阪市鶴 橋鶴斎会会 員名簿」よ り(66名)

Persons Who Come and Go between Festivals and Funerals : Yakkofuri Performers and the Funeral Business

FUKUMOCHI Masayuki

Yakkofuri or Yakkoburi symbolizes the processions of feudal lords and traces its origins to the expansion of the retinue of the attendants of warriors. Around the mid-1600s, yakkofuri was included in festival processions because of the pageantry of the costumes. Some time later, the unique dances came to be valued as performances, and, influenced by kabuki dances, they were often included in the processions of feudal lords. Today, yakkofuri are folk performances seen in festival processions throughout Japan.

Before the appearance of the funeral litter in Osaka, this yakkofuri was seen in funeral processions that took bodies to be cremated. The sight of retinues that enlivened festivals in solemn funeral processions is truly incongruous. It is understood that this occurred because in the Early Modern period funeral businesses in Osaka supplied people for the processions of feudal lords, and in the Meiji period a new business evolved in which yakkofuri was incorporated into processions that took place for large funerals. It has also been said that the fondness for flamboyant and garish funeral processions with yakkofuri is a trait unique to Osaka.

However, a look at the composition of funeral processions reveals that yakkofuri was one part of the retinue of Buddhist monks. That is to say, yakkofuri was added to funeral processions as retinues for priests and monks. Examples of retinues accompanying priests have also been confirmed in documents dating from the Early Modern period belonging to temples in the Koto area of the former province of Omi. According to these documents, retinues of priests called “ondoshi ninsoku” or “tera ninsoku” and retinues of attendants comprised part of a funeral procession.

In a number of shrines in Osaka, when festivals took place yakkofuri was performed mainly by those in the funeral business. As suppliers of people for the processions of feudal lords, Osaka funeral operators came and went from shrines and temples on a daily basis. When festivals were held they stood at the head of the procession to lead others, and made arrangements for a variety of participants, including retinues of attendants. The role of leading a procession was reserved for a particular operator for each shrine, with Kagotomo leading the Osaka Tenmangu procession, Kumadaya the Goryo Shrine procession, Awaya the Namba Shrine procession, and Hirakyu the Kumano Shrine procession. It is said that the yakkofuri dance was different in north and south Osaka.

The persons who performed yakkofuri seen in funeral processions in Osaka came and went freely between ceremonies for the dead and Shinto purification ceremonies. Their origin goes back to attendants who accompa-

nied the retinues of priests in funeral processions and funeral businesses that supplied participants for the processions of feudal lords.